

---

# お家の国のアリス

鶲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お家の国のアリス

### 【Zコード】

N4144D

### 【作者名】

鶴

### 【あらすじ】

…夜ひとり、童話【不思議の国のアリス】を読んでいたとき物音が…！！アリスの家に落ちてきた不思議の国の住人とアリスの物語。遅くなつて申し訳ありませんm(――・;)m後少しで更新できる予定ではあります(――・;)まじすいませんo・v・

## 1日目 風の前の風

日曜日の曇下がり  
庭の大きな木の影で  
姉が本を読んでいる…

（座つて読めばいいのにな…  
あんなに動いて暑くないのかな…）

そう、今は夏の真っ直中。部屋の中で冷房ガンガン効かせて涼しむ  
のが普通ですよねー

…しかし

我が家家の冷房は壊れてる…

理由はそつ…

この炎天下の中、わざわざ木陰から抜け出し、小芝居しながら童話  
【不思議の国のアリス】を私に読み聞かせてる姉のせい…

事の発端はそつ…

姉のこの発言…

「今は地球温暖化…！冷房は28 設定よ…だから今日から我が家はそう設定するのよ…！…決まりね…！」

「いつ我が家は姉の持ち物になつたんだろう。  
食事中にも関わらずいきなり閃いたように席を立つやうなんだ

もちらん手は握り拳。

あーあ、正直スープ零れて勿体ないと思いましたよ…

「これだけじゃもちらん冷房は壊れませんよ?」

この後会話が問題…

父「えー暑いからヤダ」

膨れ顔でふんつ…「50代の父親がやるもんじゃないですよね…正直気持ち悪い…

姉「そんな…暑いからって我儘言わないでお父様…今全国民の方々はやつしてこむのよ…やつてないのは我が家くらいなものよ

…」

母「どうもやつてないなんてなにわよ」

…「わつ冷たて…母…スープ冷めちゃつたじゃんつ

姉「そ…そ…そんなこと…ないはずよ…」  
いつ見ても姉は母に頭が上がらない

そして自信も無くなつたら…

そして…

父「まあお母さんもいつまつてゐる事だし(ハハ)家の冷房全部破

壊しないかぎり28 設定にはしません（一一一二一四七）

待て父…そんなことしたら28 設定どじいのか家は蒸し風呂になる  
よ?!

SI・KA・MO!-!-

父!-!アンタは18年間も姉と暮らして来たにも関わらず…-!  
姉の行動力を忘れているのかこの50代が!-!-!-!

姉「わかったわ…」

…きたつ…

姉「壊せばいいんでしょう…やつてやるわよつ…-」

…こうして姉の破壊活動は始まり、見事1、2、3…わかんないや  
まあ数えきれない数ほどある冷房が見事すべて役目を強制的終了…

哀れ冷房…

そんでまあ姉の破壊活動中に帰つて来た兄も被害をくらいい脇5本、  
右腕、左足を複雑骨折まあ、入院。まあ兄は…うん、なんとかなる  
つて信じてる

まあ、その惨状を見た父は真っ青。母は海外行のチケットを手配し  
てたなー…たぶん懇願してすがる父と非難するんだろう…ヤダモン  
ネ蒸し風呂

私もいれてクダサイ

あ、無理ですかソウデスカ…

目で睨まれたんだぜ…

私無関係なのに…

そして今、満足そうな顔をして小芝居してる姉と蒸し風呂で一人きり…庭にいるのは蒸し風呂が我慢出来ないから…

はあ…どつから見ても豪邸なのに…姉め…

と、いきなりケータイの着信音…なんで世にも奇妙な物語なの…

「もしもーし」

『あ、姉? 今日からセーラーメリカに行くんだー よかつたら一緒にいかないかなーって電話したんだけどどつ?』

陽気だ…陽気な声が聞こえる…声でかいなおい姉友Aめつ…

「えつ……まじで……行きたーい…」

『じゃあ行こうよー…』

「あ…でも…」

姉がこっちをチラ見する…

んな何回も見なくていいし…

「…行つて来ていいですよ?」

これ以上姉と一緒にいたら面倒な事になる…

長年…てか、16年の私の経験が物語つている…

「え？ほんとに？！やつたー！！姉友A！！行くわー！！  
『よつしゃつ！！』そうと決まつたら夜迎えに行くから待つ…てな！  
！」

タメなげえよ…  
てか、イキナリ…

「おつけ…待つ…てる」

なんでじょうかこのハイテンション…ついていけない…

じやつ…と言つて電話が切れた

「アリス…！てなわけで夜露死苦…」

古い…古いよ姉…

「はいはい、気をつけてねお姉さん」

「うん…」

と言葉を置いて猛ダッシュで蒸し風呂の中へ走つていきました…

まあ、冷房は明後日には直るんだけどね。金持つてやつぱい的な庶民な暮らしは私にはきっと出来ないな

いや、家事全般は一応出来ますよ？勘違いしないでくださいね？

まあ、夜になつて姉は旅立ちました

「一年位は帰らないから…！一人で頑張つてねえ…  
…ちょ待て、親もそのくらい帰つてこないぞ！？だって使用者が一年の有休とらされてるから…

ほんと一人だ…まあいいか楽だし

そして蒸し風呂に一人になつた…  
あ、兄…お見舞いには…行かなくていいか

家が騒がしくなつたのは新しく冷房が取り付けられ、ひとり優雅に  
姉が落して行つた本【不思議の国のアリス】を読んでいる最中だつ  
た：

## 一四三 風の前の風（後書き）

なかなか長くて申し訳ないです  
次からは読みやすいように頑張りますーー！

## 2日目 突然の来客者

「ふう……」

冷房の修理業者が来たのは朝の8時…作業が終わったのは夜の10時…

そりや広いからね…  
仕方ない事だと思ひけど…

ただ…お茶とか差し入れるたびに絡んでこないでほしい…  
やりたくてやつてゐわけじや…！

「やつたくなーのになんでもつてるんだ…私…マジ疲れた…

部屋に戻つて寝ようと思こベットに倒れこむ

…ジン…

「…ねこベット…私はそんなに重いのか？（怒笑）」

まあそんな事をベットに言ひても仕方がないことはわかっているの

で、ため息をついてアリスは口を開じる…

⋮

⋮

⋮

「寝れないとかマジ無いわあ…」

ふと起き上がりなんかないもんかと机の上を見ると

「あつあつた

それは姉が残して行った【不思議の国のアリス】

「寝るまで読もうーっと」とページをパラパラ

……はつ……

私としたことが読みふけつていた……

時計を見ると午前2時……

まあ、夏休みだし……始まつたばつかだから別にいいんだけど……

「……静かだな……」

誰もいない……

この広すぎる家に私ひとり

「……あ……やだやだ……どうせ私は淋しがり屋ですよ……」

つとひょつとした心の本音を吐きまた本の世界にいりつとした…

その時だつた…

「…フ…「わああああああ…」」

ガツシャーン…!…!

突然の悲鳴と物の壊れた音…

「…フ?…!」

いきなりの物音に私の寿命は3年縮んだと思つ…  
よつはビビつたわけですよ

泥棒?

でも…ねえ?

こんな物音たてたら泥棒失格だよね…

「とりあえず確かめないと…」

そう思い私は物音のしたリビングへと向かつた…



## 2日目 突然の来客者（後書き）

さあ誰が落ちてきましたかねー?

…誰にしよう…、

ほんと…誰にしよう（滝汗

私は…目の前にある物が信じられない…それと同時に絶望的になつた…

扉の前から気が付かれないように中を除いて見ると

倒れた棚…

散らばつた食器…

半壊したテレビ…

吹っ飛んでるテーブルと椅子

無事なのは時計くらい…

そして…

時計と向き合つように唾然とへたりこんでいる男の子が一人…

「うわ…なにこれ…」

あまりの惨状にそれ以外言葉が出て来ない

…つとその声が聞こえたのか男の子が振り返った

大きな目に涙を浮かべながら…

やばい…！

つて思つた

まあ…瞳に涙いつぱい…

だけどちょっと恐怖が… だつて目が赤かつたから…

体が動かない…

ドラマとかで殺されそうなとき絶対逃げられやつなのに殺されるの  
つてこんな感じだからかな…

そんなことを思つていたら

「…」

「…」

「…」

…大泣きされてしまいました…

۱۵۹۸۰ ...؟ - ۱

声の大きさにびびり私は思わずその男の子をなだめに駆け寄った

「どうあえず泣きやんでっ……ねつ?!

必死で止める

泣いてる子なんてなだめた経験少ないしつ

なんて声かければいいのつ？！

「ひとつあえず泣きやんでもよ～…私が泣きたいよー…」

声はおさまつたもののまだ嗚咽をあげている男の子を困つたよつて見る

と気付いた事がひとつ…

さつさは真っ赤な目が印象的過ぎて気付かなかつたけど…

「み…耳…？」

男の子には白こいつが「さきの耳がついていました…

本物なのかなー？」

「ねえ男の子。」

少し喋れそうになつたのを見計らつて喋りかかる

男の子は少し大きなYシャツで袖をぬぐい  
キヨトンとした顔でこっちを見る

チエックの縁のベストに白いYシャツ、チエックの縁の短パン、赤い蝶ネクタイに銀の懐中時計をぶる下げる

「…見掛けない姿だけど…何処から来たの?」

少し困つてそれから指をさした

「あれ…」

「…は?」

その男の子が指したのは時計…「つちにある大きなのっぽの古時計…

「あの時計から来ました…」

上皿づかいで見られる…

あ一口りは「これに殺られるんだろうなー

「つじ…そしたら君どこの人だよ?…人かどつかも怪しげじや…」

普通に話してゐる自分尊敬するわ…わらい

「あつせつめいことですか……！」

少し回復してきたのか涙はたまっているものの少し元気が出てきた  
ようだ

「僕は【不思議の国】から来ました。白いわざです……」

…私は夢でも見ているのだろうか  
夢なら冷めろ…私…

3回目 時計と野の花（後書き）

まとまつてないですね…  
ほんと申し訳ないです（、、：）

## 4日目 片付けとそして

「あ……あの？」

「…………え？」

白「つせ」だと叫乗った少年が顔を覗きこむ

そうだ……フリーーズしてる場合じゃない……

周りを見渡す……家具が勝手に片付いてくれるわけじゃないから未だ  
散らかり放題だ。

「大丈夫ですか……？」

「まあ……なんとか……」

とりあえず片付けなきゃな……

「よしっ……」

気合いを入れて、白「つせ」くんを横目で見ながら

「君も手伝つてね？」

「は…はい！」 ちょっと混乱が交ざった顔だつたが私が片付け始めたせいか彼も同じように作業を始めた。

：45分後

「ふう…」

やっと終わりの兆しが見えて来た。あとはひとりじゃ運べないテーブルとかを元に戻して終わり。

「次はなにをすればいいですか？」

「じゃあ、このテーブルの反対側持つて貰える？」

よいしょと一人で運ぶ…が…彼は力があまり無いらしく、こんな重い物は持てないらしい…

「う…うわあ？？！…！」

ドスン

潰れた。

「だつ大丈夫ですか？！」

「う…うふ…」

聞きたいのは「うわだよ…なんでそういう力がないんだ…？」  
このテーブルだって流石にひとつじゃ運べないけど、女一人ならなんとか運べるのに…

「うれじや運べないな…」

ふたりで困った顔をす。と、いきなり

「あーーー。」

つと彼がひらめいたよつと声をあげる

「ん？ なに？」不思議に思つて彼を見ると、

「テーブルはこの位置でいいんですか？」

とイスの間を指差して尋ねてきた。

「う…うん」

「わかりました。じゃあ離れてくださいねーー。」

耳がぴょいぴょい動いてる…なんか可愛いな…無類の動物好きとしてはじめつけヒットなんだけどなあ…

私が離れた事を横目で確認した彼の耳がピンと立つたまま静かにな

つた。彼が集中しているのが空氣でわかるくらい…

なにが起るのかと不安になつたが、その瞬間…

テーブルが浮いた…

「…は？」

浮いたテーブルはさつき彼が示したところに動いていき、そのまま静かに床につき動きを止めた…。

「ふうっ」

終わつたのだろう彼が啞然としている私を振り返つた。

「?.どうかしたんですか？」

「へ?あ?…いや…」

質問するかどうか迷つたがする事にした

「今の…なに?」すると、キョトンとして

「え?魔法ですよ?」

まあ超能力だとか魔法だとか大体予想はしていたがやつぱり驚きは隠せない

「へへ初めて見た!…」

と彼は最初

「え? 「って呟いたけれど、納得したようだ  
「あ、こっちの世界にはいないんでしたっけ」

軽めに笑つて言つた。

「ん…待てよ?」

「はい?」

「最初つからそれ使ってたらこんな苦労はしなかつたんじゃ…」

そう、埃まみれになりながら…重いものを持ったり大変だつのだ。  
特に半壊したテレビ…これは粗大ゴミに出して新しいのを買いに行  
かねばならない

「あ…」

びょーんとした空気がその場に流れた。

まあ、過ぎてしまつた事は仕方がない。食後の運動とでもしておけ  
ば氣にするともないし+に思えるしね。

と…ソレで今まで氣付かないとついていた疑問が明確に浮かんだ…

「あ…不思議の国つてといひから来たつて言つてたよね…」

時計から出てきたことも國も怪しいが…とりあえず信じてみる事に  
した。魔法なんて物見せられちゃつたら…ねえ?

「はい…」

「何処か行くところあるの……？」

彼が今更気が付いたとでも言ひうな顔をして……

沈黙……

「な……」

沈黙……

彼が私を上田づかいで見つめて…

「ないです…」

「…やつぱ…」

耳が垂れてる… 可愛いなあ… お…

「じつあむつもつ…」

「じつしましょい…？」

ふたりして苦笑い…

まあ、追い出す事もできるんだけど… 不安だ… 一回関わっちゃった  
し、そんな事したら後味悪いしね。生憎つむけつけ、部屋も余ってる…  
家族も1年くらいは帰つてこない…

「じゃあ…」

「大丈夫です…！」

「え？」

「自分でなんとかしますから…！」

彼は笑つて私をみた。今にも泣きそうだ…

そして、ドアを通り出で行つた。

「えつちよつと待つて…！」

まあ……それなら別に引き止める必要もないんだけど……でもなあ……警察とかに捕まつたらなんか……研究所とか連行されて解剖とかされちゃいそうだよなあ……

とか思つてたら

「うわああああああ……」

「……は？…」

見たら彼が転んでいる。しかも……ものの見事に顔面クリーンヒット……床に。

「大丈夫……？」

転びっぱなしちもなんなのでとりあえず座りせる。

「すみません……」

痛いのだろう鼻を押さえている。

「あのさ……」

私は覚悟を決めた。

どうなるかはこれから決まる事だよね。それに……生うさ耳……は……違ーう！！！！！」んなどジっぽい人野放しにしたら大変な事になるし、掴まつたら……

「……行くところないならひさしごとにいたり？」

「え？」

「どうせ……うちんち誰も帰つて来ないし……それに……」

……生ひた耳……

「いいんですか？！」

彼が顔を輝かせた

「うん」

つられて私も笑う

……つとその時だつた……

なんか空間が揺れてその後に大きな音が響いたのは……

4回目 片付けとそして（後書き）

田代がへこはで、ジッ子です笑

アリスは無類の動物好きなんで耳とかにめりもくちも弱いんですね笑

さてさて、また誰か出できますね～笑  
誰にしまじょ～（^ - ^）

## 5日目 一人目の来訪者（前書き）

今回は初登場の彼女の視点からはじまりますーー！

## 5日目　一人目の来訪者

…ん? ここはどこだ?

どつかから落ちたのは確かになんだが…

キヨロキヨロと周りを見るとやっぱり見覚えがない…

すると… じつを凝視してゐる一つの顔に気付いた。

「? !」

少しひっくりして二人のいるほうに構えた。

「三月一日?」

「白うわわ~!」

「え? ?」

自分は目を丸くした。二人も同様にひっくりしているようだ。

だつて…いきなり落ちたと思ったら知らない場所だし…白うわわはいるし…仕方がないとは思う。…見知らぬ彼女もそうなんだろうか

「なんでもいいんだ？」

「それはいろいろが聞きたい。」

自分はぱつぱとお気に入りの着物についた埃を落しながら白いつさきに答える。ん？あまり汚れていないな。こここの宿主は綺麗好きなのか？「ことじとじだ。

「えつと…あの子…は…？」

彼女が白いつさき尋ねているようだ。失敗した自分としたことが先に名乗るのを忘れてしまった。

「えつと彼女は

「三円みつせんだ。名乗るのが遅れて申し訳ない。」

白いつさきの言葉を遮り言つた。

「え？…あ…私はアリスト…よろしくね…？」

あつと自分の喋り方に惑つていてるんだろうな。周りから冷たいと言われるが…彼女もそう思つだろ？。

「ああ」

「それよつ…」

「いつきが苦笑いして囁く。

「片付けませんか？」

「ん？ あ…」

周囲を見たときに気付かなかつた…

テーブルが倒れてイスが散らばっている。まあそれ以外に片付けるものはない」と思うが…

「やつね…片付けましょーつか…！」

「わつよつぱんじですな～」

「わつわつ…」

「僕が落ちて来たときですよ」

「いつきが笑つて囁く。

「もうもう…部屋中めちゃめちゃになつちゃつて片付けるの大変だつたんだ…！」

「ふむ。」

それならこれは楽なまつだな。 イス立てたし、今運んでいるこのテーブルを置けばお終いだ…

「ん？ 待てアリス。」

「え？」

「白うさぎは腕力がない……どうやつてこれを持んだんだ？」

ふとした疑問。言った瞬間、自分は無駄な時間と体力に気付いた。

「え？ それは白うさぎくんが魔法で……あ……」

アリスも気付いたらしい。テーブルを元あつたらしくてこらに置いて白うさぎを見る。当の本人はそんなこと気付かせらず、片付け（主に落ちたものを拾う）をしている。

そんな様子を見てふたりでため息をついた。

「白うさぎ」

「終わったよ～」

程なくして声を掛けると白うさぎが振り返りにこいつと笑った。

「じゃあ片付けも済んだ事だし……寝ますか！――

「は――三月も行くとしないでしょつから一緒に泊めていただきましょつから――いいですか……？」

「私は構わないよ～」

「ん？…あ…よひしょく頼む」

そうこうえば眠いな…

「じゃあ、案内するからつこいき…」

アリスはそう言い、その後を立つやうとつこいつた。

アリス side

大きな音がしたと思つたら、あの時計から出て来た…

茶色い肩くらいまである髪の毛と耳、あと茶色のついた耳… それから黒色に赤い花の絵の入った着物…

一瞬耳を奪われるような可愛さ… 可愛い女の子大好きな私にとってはモロ好み…

見てたり会話をしても思つたけど適応力があつてこの状態にもあまり動じてないみたい…

声はなんか低めなのに可愛いつてゆつ… わかんないかなあ？！！

言葉は丁寧だね…

たぶん、性格はテキパキして男勝りな気がしなくもないけど… これは私の推測だからなあ…

とりあえず、白うさぎくんと同じで行くところがないっぽいので一通り終わつた後、部屋に案内した。

その後、私は部屋に戻つて、これからどうなるんだろ?って思いつつもちよつと楽しみにしてたりしなくもない。

朝、私は一人よりも早起きして朝ご飯を作っていた。宿主がお密さんより寝坊してたら話にならないもんね！…ってゆうのが私の考え。なにを作つたらいいのかよく分からなくて試行錯誤の結果、定番のサラダ、田玉焼き、ハムにトースト…ほら…やつぱりうさぎ（うさぎ）だからね…野菜かなつて思つて…それに簡単だしね…！料理作れないなんてことないんだから…

と用意出来たといひで田代さん（あわせさん）が降りて來た

「おはようござます。」

「あ、おはよう……」

…ヤバく可愛い…パジャマがサイズが合つのがなくてとりあえず兄のを貸したら…想像通りぶかぶかしてて…しかも寝ぼけ眼のクリクリショートヘア…+伏せ氣味のつせ耳が…光つてるキラキラしてるよ……おつと鼻血が…

「…おねーさん？」

あー…上田使いがヤバ…

「おはようござます。」

そんなことやつてたら、凛とした可愛いクールな声がした。三月ちやんだ。昨日と変わらず素敵に可愛い。服は昨日と同じ物を着てい

る。

「おせよ! ハーー。」

三田ちやんの声を聞いて少し現実に戻れた。

「田代ちゃん。こつまでそんな格好で… 着替えてきたらどうだ?」

「く?…あ…」

今自分の格好に気付いたらしい。慌てふためいて

「… つ… 着替えてきますーー。」

つと真っ赤になつて走り去つた。まあ、私としてはよかつたような  
勿体ないような…

「… それは朝食ですか?」

「うんーー。」

三田ちやんが朝食を指差して言ひつ。

「なに作ればいいか分かんなかつたからとつあえず作つてみたんだ  
けど… 食べれなかつたら無理しないでね?」

「いや、粗末にしては罰がある。是非いただくよ。それに…」

「それ?」

「美味しそうだからな」

「………」

笑顔！笑顔！ヤバい！可愛すぎる……私の心臓持つかなあ……

「アリス？真っ赤だぞ？大丈夫か？」

「え？！……だ…大丈夫…！美味しそうなんて言われた事なかつたから…！ありがとう…！」

は…恥ずかしい…

つとそんなことやつていていたり立つたわぎへんが降りてきた。

「では、朝食にしようか」

そう言われ、全員が席についたとした…その時

一人、先客が居る事に気が付いた。

ギョッとした顔でそいつを見ると、

「ん？食べないの？俺待ちくたびれたんだぞー」

「ヤニヤしながら言ひ。

「………」

「「チエシャ猫！？」

チエシャ猫と呼ばれたそいつはダークレッドの髪にピンクと紫の耳としつぽ。服は…タキシードっぽい…イメージ的にはチャラい執事つてどこかな。

「チャラい執事なんて失礼な」

チエシャ猫は笑顔で言つ。

「…？！」

「正真正銘、執事なんですけど」

「…なつ」

「え？…読んだ？この人心読んだ？」

「うん」

「うつそーーー！」

「嘘じやないよ」

絶対、私…今、百面相してゐる。

「なんで読めるのよ？！」

「え？俺だから」

開いた口が塞がらない

「それより食べようよ～冷めるし。それに俺お腹空いた。」

なんて我が儘な。

「とつあえず… 食べましょ～か」

由つじがくへとが苦笑して言つた。

朝食が始まった。もちろん私の朝食は家においてあったコンビニで  
買ったパンです…

## 6日目 朝食（後書き）

これからは5～7日以内に更新頑張りたいと思います（^\_\_^;）

感想などいただけたら嬉しいです。o( ^ \_ ^ )o

7日目 猫の落した理由（前書き）

軽一ぐふれる程度です

## 7日目 猫の落ちた理由

「チョーシャ猫」

食事を食べ終えたらしげ白いつわくくんが声を掛けた。

「ん?」

「どうしてひしゃく?..?」

「ん~?穴から落ちた」

パクッとパンを食べつつ答える。

「公爵の家にも穴があるんですねか?..!」

少し驚いたよひしゃく

「んや~.」

田玉焼きを口に放り込んで

「公爵夫人から君へ。ラブレターをね、届けに行つたんだよ~」

「「ラブレター?」」

三月ちゃんなど重なつた。三月ちゃんは

「ああ、恋文か」と納得したように再び食事に戻る。パン半分程と、あとはハムが残つてゐるくらい。白うさぎ君は「…」と、少し真剣な顔をして「…」。三月ちゃんが納得したからだろ？ 私には氣付かず答えてくれそうにな…」

「そんでもうつて君の部屋に潜入してみたら…」つわーお

「落ちたというわけですか…」

「わゆー」と

「「「「」」」

三月ちゃんとチヨンシャ猫の声の声が重なる。食べ終わったよつだ。私？ 私はどつぐの昔…」

「…」

「はー?」

「自分の経緯は聞かなくていいのか?」

「なにを言つてるんですか?」

「?」

「人がキヨトンとした顔で見つめあつ。

「三月を呼んだのは僕じゃないですか」

笑つて言つた。

「あ…」

対象的に三田ちゃんはやつてしまつた…みたいな顔。ふふつと私は笑つてしまつた。

「ねえアリス、ギッチンはあそこでいいの？」

二十九

びびびびつくりしたあ……！……！だつて……一人見て密かに笑つてたし、なんかイケないとこ見られたみたいで……  
ふとチエシャ猫を見るとキッチンを指差しながら『は？』って顔で  
ガン見している。

# 「何語デスカ?」

う

チエシャ 猫に鼻で笑つていわた。

「…………アリス語デス…………」

苦し紛れに答えた

「なんだそれ。まあ、そんなことどうでもいいんだけどね」

「へ？…ひど…！…つくな…い…な…てかなんで私の名前知つてるん…テ

「じゃあ俺上付けるからー積もる話もあるだろ? いやもうへへへ

「スルーかー……放置プレイとこうかのスルーかー……」

口笛吹きながら奴はキッキンへと入っていった。

私はため息をつっこみ三回もやんと戻りながら向こうへと直った

7日目 猫の落ちた理由（後書き）

三月の一人称は『自分』です  
少しおかしいと思いますがご了承ください  
m(ーー)m

「ありがとうございました」

定員さんがマニコアル通りのセリフと笑顔で言つ

「よし……」それでチエシャ猫の買い物は終わりね……」

「あつ、アリストアレも欲しいな~」

チエシャ猫が指差して言つたのはガラス細工の食器など

「今日はみんなの服を買いに来たんだからまた今度ね」

なんで今こんなことになつてゐるのかと言つと、

「帰る方法がわからないだと?..」

チエシャ猫との会話を終えた私にそんな言葉が飛び込んで來た

「はい、どうやつてここに來たのかもわかりませんので…帰り方も  
わかりません。共通点を挙げるなら”僕の部屋から落ちて來た”と

「うとうじょひか…」

「ふむ…お前の部屋が原因…と考えるのが妥当か…それとも他になにがあるのだらうか…」

真剣な雰囲気に私は入れずじまいでの場にただ、たたずんでいる

「とりあえず…」

「ん?」

「当面の問題は着替え…ですかね。家についてはお姉さんが貸してくださるみたいですし…」

「ああ…アリスが気紛れでない限りはそれは大丈夫そうだな…」

んな…私どんな印象よ…

「そんな印象なんぢやない?」

「…つ…!!…!!…!!…」

「…そんな…世にも恐ろしいものを見たような顔で見ないでよ」

「ヤツと笑つて言つた

「折角の素敵な顔が台無しだよ?甘栗色でセリロングのふわふわ髪なんです」く好みなのに」

「なつ…-----」

近いっ……近いよ……絶対顔赤いつて……！

「照れちやつて可愛いなあ～」

クスッと笑つた

「そんな事より……」

「……なによつ?…」

そんな事つて……なんか天から地へ叩き落とされた氣分……

「……お金に血由はある?」

「……せ?」

なに?女口説くよつな事言つておいていきなり金錢問題ですか?

「アリスは yesか noか答えればいいんだよ」

その張り付けてる一ヤツとした笑顔に色々重なりだんだんイラついてきて

「あるわよーーなめないでーーじゃなきゃこんな豪邸住んでないわ  
ヒーーー」

「じゃあ決まりだね。覚悟はいこ?」

「……せ?」

「おーい！一人共々」

「「…ん？」」

「アリスが買い物行くからついて来いつてさ～」「…はあ？！」

お前！…人の金だと思いやがつて…！

まあ…そのつもりだつたけど…

「じゃあいいじゃん」

「…それもそうか。」

そして、

「いや！…悪いですから…！」  
「自分の事くらい自分で出来る…！アリスが負担する」とじゃない  
…！」とか言って拒む一人を主にチョシャ猫が担いで強制連行…  
そして今に至る。

「ああ…三円ちやん…白いつせきくふ…ちやうかやと決めちや

「おう…！」

二人を見ると

「いや…でも悪いですから遠慮しておきまよ

少し遠慮しがちな目で私に訴える

「同じく、金を借りて自分の欲を満たす事は自分の道に反する。」

# チラッとチエシャ猫を睨む

「そんな堅い」と言つなつて、困るのさキハ11なんだから」

対するチヨシや猫は一ヤツと笑ったあの顔のまんま…。

「そうだよ！毎回同じのじゃヤダよ！私が！？」

折角可愛いのに可愛いのに可愛いのに

「でも…」

「私の気が済まないのーー！」

「アリスもこう言つてる事だし」

「でも使い回せば平氣といえば平氣なので…」

「なにがつもー！」

— : ?

「その耳と尻尾が目立つてゐるの――――――」

いや、これは考え無しに連れ出して来た私に責任があるんだけど……

「「…あ」」

「だからせめて帽子は買つわよーーー。」

どうやら納得してくれたみたい

そんなこんなで帽子を買つたら私が止まらなくなり無事4人の買い物を終えて帰宅！－

まあ、周りに見られていたのは仕方ないからいとして、誰も本物だとは思わないだろうし－－

「あのつありがとございました」

「アリス、感謝しておぐ

少し照れながら囁つ  
か…可愛いいーー！

「いいんだよ～気にしないでーー。」

「俺もお礼言つとくよ～  
アリガト アリス」

「…いーえ」

「えつに? なにその反応?」

「なんでもない?」

「冷たいなあ~

まあいいけど。」

まあちよつとチョシャ猫はね。いろいろやられてるわけですから…

「これじゅつてなに?」

「ヤーヤ

「自分で聞け! !」

そんなやり取りをふたりがクスッと笑いながら見ていた。

9日3回 楽茶会（複数回）

體子座さんまだ出できません（・・・）スリーマセイ

「お茶会しませんか？」

「コンパクト掃除をしていたら、いかにも和室……って感じで田代さんが言ひ出した

「お茶会へ。」

「はー……大きなお庭もある」「でし……ここ感じに影もあるので……いかなつて思つたんですね……」

少し控え田代味になつた田代が言ひ出した

「いいね、やねりか……。」

「え? な? お茶会やるの?」

ひょりいつ出てきたチヨシャ猫が口を挟む

「はー……田代も呼んでみんなでやねりかなと」

「田代ながら言ひ

「じゃあセッティング任してよ~使ってみたいティーセットあるんだ~」

「ん？ あんたティーセットなんて持つてたの？… まあ、いいや。どうぐるいかかる？」

「すぐ終わるよ～」れでも執事だからね。だから二田呼んでもきなよ～」

内心、そんなにすぐ出来るものなのか～と思いつつも「よひじへ～と言こ残して、ふたりで二田ちゃんを呼びにいった。

「ハハハ

「…はい」

ガチャ

二田ちゃんがドアを開けた。

どうやら、前に買った服・着物を片付けていたらしい。入っていたと思われる空箱が山積みになつている

「ん？ アリス…と曰ひたれど？」

「あ、邪魔しちゃったかな？」

「こや、そんなことはない。」

「あの、今からお茶会しますと申しますが… 一緒にどうですか？」

？

「お茶会？」

「うんーー今チエシャ猫が用意しててね、白うさぎくんが考えたんだよー」

「毎日お茶会やつていたのでやらないと寂しいかなと…」

「アリ…毎日やつたの?」

「ああ……」「

「僕は毎日はやつてしませんでしたけど、三円達のところにいたまでは  
邪魔して……」

由うせがくらがそれまで話したとき、二円ちゃんの表情が少しだけ曇った

「...」  
「...」  
「...」

# チリンチリーン

尋ねようとしたときに庭のほうから綺麗なベルの音が聞こえた

「お~い、用意出来たよ~」

チエシヤ猫の声だ。

つと大きな声で叫んだあと、

「話はまた後で！行こう……」つと黙つてチヨシャ猫の待つ庭に向かつた。

なんだかんだでこんな生活にも慣れてきた。  
朝起きると三月ちゃんがもう起きていて、朝食が出来た頃に虹の  
わくわくが起きてくる。

チヨシャ猫は…私より早かつたり…かと思えば夕方くらいまで姿を  
現さなかつたり…ほんと猫つて気紛れ…。

…つと、ひとりキッチンに向いながらふと想つ。

お茶会をしていたところ、お茶菓子がない事に気付く、

「だつて、見当たらなかつたんだもーん」…つとチヨシャ猫。キッ  
チンにクッキーがあつた気がしてひとり探しにきた。しかも…チヨ  
シャ猫が使つてみたないと想つていたティーセットはやっぱり私の家  
の使つていなかつたやつ。まあいいんだけど…なんで無断な  
のよ…

来るとき、三月ちゃんが一緒に…つて想つていたけど、そんな時間が  
かかることでもないし断つた。なにより、久し振りだといつお茶  
会を楽しんで欲しかつたし。

といふえずクッキーを探す。

ない

ない

ない  
..

最後に残った冷蔵庫を開けて見ると…

「ナニ、アーティストのアーティスト？」

「行ってしまった…」

「アリスがいなくなつてからのお茶会場。

「その内戻つてくわよ~」

「それにしてせつねつお茶会と並んで…」

「帽子屋を思い出すねつあと踊つネズミ。」

「エシャ猫が鼻をならじて言つ。」

「エシャ猫はほんと帽子屋が嫌いだな」

呆れた調子で三月が言つ。

「うふ。俺もあんなに相容れない奴がいるなんて思わなかつたよ」

「ナゼ…三月は帽子屋が好きなんですね」

「えつ…あんなのが好きなの…三月…悪趣味だね?」

「誤解するな…別にお前が思つてゐるよつて見ていろわけじゃない。放つておけないだけだ。」

「ふ~ん?まあイイケド。いなきやしないで寂しいもんだね。」

「ん…ああ…」

三月の顔が曇る

「……ずっと気になっていたんですが…」

「チエシヤ 猫と帽子屋にて…なんて仲悪くなつたんですか?」

「ん？ ああ… それはねえ」

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての才能をもつておかなければなりません。」

いきなりアリスの悲鳴が聞こえた。

その場の全員立ち上がり、駆け付けようとしたが

「俺が行つたほうが速い！！待つてろ！！」

チエシャ猫の制止にふたりが止まつた。すぐにチエシャ猫の影は見えなくなり、ふたりは呆然としながらその場に取り残されたのだった。



9日 三 お茶会（後書き）

ギリギリの投稿になってしまった（^—^・）

バレンタイン企画を書いつかなど悩み中です（　・・）季節が全く  
違いますからね。なんせ夏です ㅠ

もし読まれてる方で書いて欲しいと言う方がいらっしゃいましたら、  
感想などでお知らせくださいと書く気がでるかなと思います。

なのでお任せで…！

毎度読んでいただきありがとうございます（、・・）まだ終わりま  
せん ㅠ

…ドンッ

キッキンの入り口を通り抜けた瞬間アリスとぶつかった。

「あやつ?—」

「つおつ?—」

びっくりして軽く悲鳴をあげる。  
ハツと我に戻つて

「…なんかあつたの?」

と尋ねる。見てみると手に財布を持っている

「なんかって…チエシャ猫がいたからびっくりしただけよ」

なこを言つてゐるんだこの子は…

「そんじゃなくて…わつわの大きな悲鳴だよ」

?マークの浮かんでゐる彼女に対し、俺は呆れた口調で言つた

「……？……あ……ああ……」

一瞬間をおこして思に出したらしく。

「なにがあったの？」

「わつ一度尋ねる。

「あ……あのね、冷蔵庫に……」

「冷蔵庫？」

ふと冷蔵庫を見る  
特に異常は見られない。

「冷蔵庫がどうかしたのか？」

彼女は俯いて

「食材がないの……」

「は？」

思わずこの聴力の素晴らしさに血煙で膨れた耳を躊躇した。

「昨日買つ忘れてて食材がないの……買ひに行かなきや夕飯抜きになつちやつ……」

『ああ……だから財布か……とゆづか……』

「そんなことであんな大声出すなよ。みんななんかあつたんじゃな

いかつて心配したんだぞ？」

「え？ そりなの？…」

「う…うめんなや…」アリスは俯いて言った。

「… いかで、出前とかないわけ？」

アリスとふたり、庭に向かいながら話す。  
アリスは片手に財布を持って、俺は冷蔵庫の上にあつたクッキーの缶を持っている。

「出前…うれしく配達してくれるといひなんてないわ…」

「やつや また… なんでだい？」

素朴な疑問。

「姉がね… 恐いのよ…」

「お姉さん…」

「やつ… 妄想狂といつか… なんていつか… 敵襲だあ… とかいつか配達に来た彼らを襲うのよ…」

『「うわあ… 頼まれて来たのにそりやないな…』

「そりゃあ…来なくなるな…」

「でしょ？ヒドい人なんて約1年入院よ？しかも、費持ちは当たり前だけど、うちなんだから。それ以来…うちでは出前は禁止なのよ。」

「お姉さんがいないときは？」

「…試してみたわ…結果は同じよ。姉が何処からともなく沸いてでるのよ！…例え…姉の3泊4日の旅行の日の…2日目に頼んでもね…」

…ホントに人間か？

「今、ホントに人間かよ…って思つたでしょ？」

「ん？…うん」

「人間よ…たぶんね。だつて姉妹だもの。」

「ああ…そうだよね」

「？」

キヨトンとした顔で見てくる  
俺は笑つて

「お姉さんが人間じゃないとアリスも人間じゃなくなつちゃうもんね」

「…………なこおう！…」

アリスから繰り出されるパンチを軽く避ける

…そんなことをしながら庭に着いた。

「お姉さん大丈夫でしたか？」

「なにがあつたんだ？」

ふたりして聞く。余程、心配だったのだろう。僅かしか一緒にいないのにここまで心配出来るなんて感動だね。

「…あは

アリス。苦笑い。

「「…？」」

「冷蔵庫にね～なにもなかつただけなんだあ～

「全く…。大騒ぎし過ぎだよね。ひとりで

「…う”つ

「けど、それだけならよかつたですー。」

笑顔の由ひさぎ。

「ああ、なんともなくてよかつた」

少し呆れ顔だが、安心してこよみつな三郎。

「えへへー」

と苦笑のアリス。

「あ、それより……買い物行かなきやだから私、行つてくるね……」

「ひとりでか?」

「ん?・うんー・」

「なら自分も……」

「いや……みんなはお茶会楽しんでくれなきや……買い物はひとりで十分だし……」

「だが……」

「いいからいいから……」

と黙つてアリスはそれと行つてしまつた。

しづむひくじて、門を出たのであるひつ《ギイ》つと音がした。

「……なんと書つか……」

「こんな意味で強情ですね」

お茶を飲みながら白川が話す。

「…？」

そこで、ふと…違和感に気付いた。居るべき者がいなことよくな…

「あれ？ チェシャ猫がいませんね」

「追いかけたのか？」

「気配を断つっていたのでしょうか…気付きませんでしたね…」

「まあ、アリスを追いかけたのだるつな」

「でしううね。彼のことですからこの家は隅々まで調べたでしうし。」

「まあ、推測していくても仕方がない。」

そこでの話は終わり…アリス達の持ってきたお菓子に手を伸ばした。

突然の何かが壊れるような物音がしたのは白川と話を始めて数分たつた頃だった…。

「うつ…お”も”い”…つ…！」

予想外に買い過ぎた。

5キロのお米を4袋持つてるような重さ…。  
手には2袋ずつでもうなにも持てない。

カートだつたから重さが把握出来なかつた…人より少しほは力がある  
から平氣…！…て思つてた自分…バー カー

「…やつぱり無…！」

途中、荷物を一旦降ろそつと、前かがみになつた瞬間、荷物が奪わ  
れ、しかもその荷物に引っ張られて前のめりにその人物へ突つ込ん  
だ。

ボスツ…！

「…大丈夫かい？」

「…？！」

聞き慣れた声に『へ？…』つと驚き見上げると

「… チエシャ猫お？！」

「なんだい？アリス」

「なんであんたがここにいるのよつへー。」

くちをアワアワしながら問い合わせる

その様子を見てにやにやしながら

「気分」

とチエシャ猫は答えた。

「気分つてあんたねえ…」

「いいじやん 実際アリスは困つてたわけだし？」

「つ、つ…」

まあ助かつたと言えば助かつたんだけど…  
「3人水入らずで楽しんで欲しかったのに…」

ボソッと呟いた

「… なに言つてくれちやつてんの？」

「…え」

「俺の楽しみは俺が決めるよ。」

「……」

チエシャ猫が荷物を持って歩きながら言った。

私は置いて行かれないようこじつこして行く

「……そうだよね……」めんなさ……」

そうだ……楽しみなんて人それぞれなんだよね……

ちよつヒショゲていると

「……まあお茶会も好きだけビね？」

「……え? ジヤあなんで?」

買い物よりもお茶会にいたほうが楽しいに決まつてゐ……

「ん? キリを放つて置けなかつたから」

「……なつ……」

「ん? ビリしたの? 真つ赤だよアリス」

「ヤツとしてチエシャ猫が言った。

自分でも顔に熱があるのはわかつたが、認めたくなくて……

「あつ……赤くなんかない……」

と叫んで荷物を2袋奪い取つて走りだした。

それは突然…

今まで過ごしていた国での話をしていたときだつた…

「ん…なるよつにしかならないんですかねえ…」

「そうだな…でも、女王も不在だと書つたのにお前まで…」

ガシャーン…!!

ガラスの割れる音となにか物の壊れる音がした

ふたりして音のほうを振り返ると

窓ガラスが割れている。

ボケツとなにがなんだかわからなことについて表情の丘つわわわ

「行くぞっーー！」

と叫んでふたりはその場所へ向かい走り出した。

「…ふう」

「だから持つて言つてゐるの」

「…いい」

「じゃあため息なんかつかないでよね。」

さつきよりも疲れたのであらう不機嫌な声がする。こんなことを繰り返しながら私たちは家に続く坂道を登つていた。

そして…

よつやく家の門の前まで辿り着いた。

門をくぐって玄関のドアまで行く。

「なんか嫌な匂いがする……でも……まさか……」

とチヨシヤ猫が言つたが私は意味がわからず  
とりあえず荷物を置きに行こうとドアを開けると

「やあ……おかえり……君がこの家の主人かい？！」

と、見知らぬ金髪のエメラルドグリーンの瞳のお洒落な帽子をかぶ  
つた青年が立っていた。

そんな突然の出来事に私は呆然としてその場に立ち尽くしたのだった。

「ちょっとーー。幅子屋ーー。戻ったんなら片付け手伝つて下せーー。」

びっくりして固まつてこる私たちのところに由つねくんがバタバタ走ってきた

「ん? 由つね、そんなに慌てて...。この家の主人に失礼じゃないかい?」

「はー? なにを言つてこるんですーー。れあれあおねえさんが帰つてくる前に片付け...」

「...由つね。前を見ろ。」

一階から二段ちやんが降りて來た。

「...?」

由つねが田を見開いて振り向いた。薄々気付いてはいたけど本当に

気付いてなかつたのか…

「おや? 気付いていなかつたのかい? — 紳士の風上にも置けないね  
…」

「と青年がいう。幼い子に紳士つ…

「おつ…おねえさん? ! 申し訳ありません…気付かなかつて出  
迎えもせずに…」

「いや…出迎えなんていらないから…! 気にしてもいないし…!  
それよ…」

「?」

からつと青年を横目で見て、その場にいた全員に聞いた。

「IJの人…誰?」

「ああ… IJの人は

「幅子屋だよ。アリス」

そこで黙りこくれていたチエシャ猫が口を挟んだ。不機嫌なのは続行中みたいなんだけど……なんかさつきと雰囲気が違う気がする……

「三月とお茶会をしていたメンバーのひとりさ。」

「ああ……お茶会の話をしたのかい？！親しいようだがいつからここに？！ああ……三月がいなくなつたのはかれこれ一週間ほど前だつたかな？！心配して眠りネズミと一緒に探し回っていたんだけどねえ……彼までいなくなつてしまつて……つと、話がそれてしまつたね！……そもそも……私がお茶会の主催者さ……。」

……聞いてないし……やたらよくしゃべる人だな……

「幅子屋は僕らと同じ出身なんです」

「あ、やつぱりそうなんだ……」

ふと、彼らが来たときのことを思い出した。チエシャ猫のときは被害はなかつたからよかつたんだけど……

「アリス。」

「……え？」

「片付けなくてよいのか？冬ならともかく…今は夏だぞ？」

「……ああーー！」

ヤバい…生肉とか生肉とか生肉が…！…腐る…！

「ありがとうございます二円ちゃんーー！」

「話なら後でも出来るからな。アリスが心配している部屋ももうすぐ片付け終わる。各自終わったらリビングに集合だ。」

踵を返して二円ちゃんが階段を上り始めたヤバくカワカツコいい…

「ほりひーーー僕たちも行きますよーーー！」

「僕かい？僕はまだ主人と話すことが…」

「三月の話を聞いていなかつたんですか？！片付けたら話せますから行きますよーーー！」

「僕にまたあんな肉体労働をさせるつもりかい？！」

「ええーさせつつもりですともーー全部アナタの責任なんですからねーー有り難いと思つてくださいーー！」

ギヤーギヤー騒ぎながらふたりが二円ちゃんの後を歩いて行く。

まあ、帽子屋が山つねひ山に引かれて行くつてゆつせつが正しいかな?

「行こうか。アリス」

「あ、うん」

残った私たちはキッキンに向かつ

片付けていた間もずっとチョシャ猫は少しピリピリした雰囲気をまとっていた。疑問に思っていたが終わってからも聞けずじまいで、これからどうなるのか不安に思いながらも答えは出ないまま私たちはリビングに向つ

私たちが集まつたのはそれから一時間後のことだった

1-2 四三 暑子屋との対面（後編）

途中放棄なさいないでくださいあつがじひやれこまか（・・・）

ぐだぐだな文はとても反省してこます..

次回は帽子屋が…たくさんしゃべります…たぶん…

## 13日 11: clean room (前書き)

部屋の片付けなんですが… 同じようなタイトルがいっぱいになつてしまつので意味は同じでも英語にしてみました( ^ ^ )

「田代やあーー！テーブルが少しズレているよーー直したまえーーあ、三田ーー足下の破片を踏まないよう気に気をつけたまえーー！」

「むつ……」

三月が足下を見て踏まないようにしている

「先程から何度も言つていいだろ？ーー先に破片を片付けたひどいだね？ーー」

「そんなに言つんしたら自分でやつたらいかがですか？」

呆れたため息混じりの声だ

「なにを言つーー私の手に傷がついたら一大事だよーーなにせ消毒しなければならないからねーー痛いのは嫌なのさつーー」

なんといつ自己中……

「田代やあーー言つても無駄だ。やつを片付けや」

時間の無駄だと言わんばかりにせつせと動いている

「三月！…それは聞き捨てならないね！…まるで私が聞き分けがないと言つていいようなものではないかい？…誤解を生むような言い方はやめたまえ！…こんなにも他人を思いやれる者は私以外には滅多にいないのだよ？…」

「わかつたから少し黙つてくれないか？気が散る。」

「なんだね三月！…その言い方は…！」

ふたりの間に火花が散つてゐる。放つて置きたいところだが今にも衝突しそうな勢いだ。

「まあまあふたりともアリスを待たせてこることですし…ちやつちやと終わらせちやこましょ？」

そう言い苦笑していると

「「そんなことわかつてゐる？…」」

…みじとなハモつ…

その協調性を少しでもいこから片付けに費やしてほしこな…と思いつつも何か言われるだらうから言わないでおく

ため息をつきながら再び片付けを始めた

三円も再開したようで火花も感じなければ声も聞こえない

たまに物を置くと帽子屋が口を挟む。

「それはそこじゃない…」  
とか…

「…帽子屋…今この場でお前の役に立つ事は記憶力がすばらしくいい」  
「…」

手伝え。と暗に聞こえるのは気のせいではないだらう

「それがなにか問題があるのか…? こうして邪魔にならないうちで正しい場所を教えてやつてこるではないか…!」

「わ…」

『口を出すより自分でやつたほうが早いだらう』とこゝ心境だらう。顔に出てこる

話題を逸らそと帽子屋に話しがけた

「帽子屋は記憶力だけはホントにすこですよいね~国で一番でした

つけ？」

「ああ、そうともさ……私に敵つ者などいないね……といひで……記憶力だけと聞こえたのは私の氣のせいかな……？」

あつ……やつてしまつた……とこう表情をきつとつてこるだらう。荒て取り繕い、笑顔で

「（）めんなさい。氣のせい……とこうしてしまはりえませんか？」

「仕方ない。一瞬の出来事でも覚えているこの私が素直な謝罪に免じて聞かなかつたことにしやうつではないか」

（）今まで上田線なんだこの男は……

グダグダになりながら一時間が過ぎた頃だらう。

『ノンノン』

「三月ばかりーん？白うつさぎーん？」

もつすぐ片付けが終わりそつな頃にアリスの呼ぶ声が聞こえた

### 《ガチャ》

「終わった？」

ドアを開けたアリスが部屋を除きこむ

「あ…

「ああ…主人…今、白うつさぎが運んでいるものを置いたら終わりだよ…待たせてしまつて申し訳ないね…！」

「えつ…あ、いや、大丈夫ですよ！」

ふと三月が白うつさぎを見るとぎょっとした顔をした。白うつさぎが頬を膨らませて、むつとした顔をしているからだ

「…白うつさぎ…大丈夫か…？」

「え？ はー。早く運んで終わらせましょ」

持っていたゴミ箱を置いてドアへ寄つていった。

見ると帽子屋のマシンガントークになつたあるしゃべりを聞いてアリスが少し困った顔をしている

『 チョシャ猫はどうしたんだうつ？ 』 そう思いながらアリスに駆け寄り

「アリスつ行きましょ」

とアリスの服の裾を掴む

「 帽子屋。話ならコビングで落着いてしちゃう

「 ああ、キミらを待つていたんだー…よしつ行こつではないかーー！」

帽子屋に連れられる形になりながらコビングへと向かった



リビングに入ると紅茶の匂いが漂ってきた。

「ん……？」の香りはアッサムのミルクティーかな？」

「…？」

「たぶんお前がそう言つたんだからだつたな。」

「あ、」の香りの」と…。」

「ああ、そうだ」

「帽子屋は記憶力とともに嗅覚も素晴らしいんですよ！」

「へえ…そうなんだ…私全然わからなかつた…す」「詳しいんですね…！」

「ん？まあ「これでもお茶会といつものを開いているからね…自然と詳しく述べるものだよ…毎日嗅いでいるから香りもわかるようになるしね。しかし、白うさぎ…僕の嗅覚は紅茶くらいにしか役立たないからね…勘違いしないでくれたまえ…！」

「そんなこと………なにかしら取り柄を持つてるのはす」「ことじだと思ひますよ！私なんてなにもないから…」

「ん？君になにもないなんてことはないわ…私はここに来てあまり口はたつていないが少なくとも君の心が広い」とはわかるよ…」

「…え…？」

「ん？私より先に来た彼らがここに住んでいるからね…少なからず和やかな雰囲気を見せてくるようだし…なぜか僕にはピリピリした雰囲気なのだけれどね…ははははは…」

「それは貴様の口頭の行いのせいだらう…」

「せうだよねえ…ホント帽子屋、キミは敵を作る性格をしてるよねえ…あ、口調もか。てゆうか存在？」

「チヒシャ猫…！…いいからど！」行つたのかと思つた

「『めんね、アリスト俺がいなくてそんなに寂しかった？』

「寂しくはなかつたけど…どこに行つたのか気になりはしたわね」

「さて、みんな。立ち話はなんだから折角紅茶も用意してあるんだし座つたがり？」

「またスルーか…！」

「それもわかつですね。座りましょうか」

あはははと苦笑しながら白いわざがうながした

それぞれソファに腰掛ける。

テーブルを挟んで両サイドに三人程座れるくらいのソファと配置的にいうお誕生日席がひとつ。その真向かいにはテレビがある。ここは私の席だ！！と言わんばかりにお誕生日席へと向こ座る帽子屋。アリスたちは空いてる席へと座る。

「では早速、どうこつた経緯で今の状態になつたのか…まとめますか。おねえさんも聞きたい事がありでしょしね」

「じつと白いわざが話を始めた。

「では、とつあえず自己紹介から始めましょつか。質問、まとめはその後で」

「…りん」

少し緊張した顔のアリス。この場の空気が少し張り詰めているせいもあるだろう

「僕は”不思議の国”の白いわざです。身分は伯爵。」

「…伯爵？…え？白いわざくそが？！」

「はい」

「…す」に身分上の人なんだねえ…」

少し疑問に思いながらも感心したようになつ

「ええ…」

ふと、由つやぎくらの顔が曇つたのは私のせいではないだろ？

「次は自分でいいか？」

「あ、うん」

「自分は三月つやぎ。まあ村人とも思つてくれ」

「次は私だね！…私は帽子屋…お茶会の主催者で身分は男爵や…！」

「…男…爵」

「次は俺ね。名前はお馴染みチョシャ猫だよ。公爵家のペット兼執事つてどこかな？」

「差が激し過ぎない…？」

「やつ？…まあ、不自由してないしいいんじやない？」

「それも… そうかなあ？」

「やつゆう」としておきな～考へても無意味だしね

「では、どういった経緯かと原因と考えられる」と云つて……」

「自分は白いつさぎの部屋だな……呼ばれたので行つて部屋に入つたらそのまま……」

「僕も同じです。本棚に本を戻そうと立ち上がつたら……」

「俺は窓から侵入したら足場のところに円い穴があつた。とりあえず避けたんだけどなんか動いていてねえ……逃げ切れなかつたんだよね……」

「チヨーシャの場合……好奇心で飛び込んだのかと思いましたけど……」

「あはつバレた?」

呆れる白いつさぎを横田にクスクスと笑う

「私はねえ、数日経つても三月が帰つて来ないものだから眠りネズミと共にね城に探しに行つたのだけれど白いつさぎの部屋を探していたら眠りネズミがいなくなつてしまい、探しに出ようとしたら穴に気付かずにな……ね。彼は今どうしているのだか……ん? おお……眠りネズミじゃないか!! こんなところにいたのか……」

帽子屋がティーカップの中を見つめながら言つ。

「それにしても……なんで穴が……つて眠りネズミ? ……」

話を続けようとした白いつさぎが驚き

「…いたのか？」

三月が怪訝な顔をして眉間にシワを寄せ

「…え？…え？」

アリスはなにがなんだかわからなさうに頭にマークを浮かべてキヨロキヨロしている

「やつと氣付いたの？」

俺はクスクス笑いながら帽子屋に尋ねた

「全く…人が悪いね君も。いたなさいたと声を掛けてくれればいいものを…！君のそりゅうところが嫌いなのだよ…！」

帽子屋がみんなの見える位置に眠りネズミの入ったティーカップを置く

「悪いね。つい、面白そ�でさーミルクティーなら色も似てたしね。

」

「…大体ねえ。食べ物もそうだが、飲み物を入れる器に他の物や生き物を入れるなんて理解が出来ないよ…！」

「俺は理解出来るからねえ。キミとは観点が違うんだよ」

「…いい加減うるさい。お前らの喧嘩のために集まつたわけじゃないんだぞ」

眉間にシワを寄せたまま二月が制止にかかる

「え～だって…俺、別にそんなこと興味ないし。それこそ、このうちの生活でも俺は別に構わないしさ～」

「チョーシャ猫……お前…」

「…ねえ、白いつかげくん」

「はい？」

そんな彼らを放つてアリスが呆れでいる白いつかげに話しかけた

目線の先のティーカップをジッとみていく

「抱いてもいいか…あ、違う…みんな人間みたいなのに…なんで眠りネズミくんは動物の姿なの？」

「へ？…ああ？…そういえばそうですね…なんでしょう？」

「向ひのうちはちやんと血分達と同じ姿だったのだが…」

「空氣が合わなかつたのではないかね？」

「空氣つて…」

「根拠はないのだがね…」

「ないんかい？」

アリスが帽子屋につつこんだ

「まあ、とりあえず…よく寝ていることだし、別に異常は見当たらぬから、放置でいいんじゃない？起きたらわかるよ」誰かついてれば〜？

「ん、そうするか。で、誰がついているつもりだ？」

「私がついてこない……やめるともないからね……。」

「あ、やつなんですよね…」

「どうかしたのかい？」

「じゃあ、残るも行くも好也！」… と二ハリヌリツキハシメハル。 ものの、  
とない方のほうが多いでしょ！」

「それもそうだな……」

「……なんの……話?」

ふと、声がした。

「え？」

「眠りネズミが寝ている間誰が見ているかという話だよ」

「僕？」

「セツだよ～おはよ～寝つネズミ」

「なんだ!! 起きたのかい?」

「…うん…うう…うう…?」

「アリスの家や…国に帰れないりじくてねえ、住ましてもうひて  
いるのだよ!!」

「…え…そう…なの…?」

頭に?マークが…かつ可愛い…ネズミも大好きな私にとつてはまつ  
この姿でも全然オッケイ!!なんだけどな…

キヨロキヨロと回りを見渡す眠りネズミ

「あなたがアリス?」

「ほえ…はい!!」

動物が喋つてるとなんか違和感が…えつと…なんだか…なんか…  
ね…

「…よの…しく…?」

可愛いからいいや。

こうして新たな入居者が一人（？）増えました。

14日 三月 眠つネズミ（後書き）

15日 田中でキャララ設定公開しようと思います（ 、 、 ）

## ～キャラ紹介～（前書き）

キャラ設定（？）の紹介です  
飛ばしてくださいっても構いません！！

## ～キャラ紹介～

### アリス

年齢：16才

身長：156cm

性格：頑張つて敬語を口癖にしようとしているが出来ていない。  
ツツコミのよくなボケのよくなどつちつかず。

特徴：金髪、緑目、青いエプロンドレス

### 田代

年齢：6、7才

身長：120cmくらい

性格：一応敬語。適当に片付けてあればなんてことない性格。怒つても向しても可愛い

特徴：白いウサ耳に尻尾。銀髪の赤目。タキシード？

### チエシャ猫

年齢：18才くらい

身長：179cm

性格：基本ノーテンキ。好き嫌い激しい。

帽子屋を嫌いといいつつ実はそれほど嫌つてはいない。お気に入りには惜しみ無く愛（？）を注ぐ。S. 公爵家のペット兼執事

二田つむぎ

年齢：15才

身長：151.3cm

性格：几帳面なA型。和服（着物）大好きで毎日着ている。帽子屋が好き…？医者だったが今はやつておらず、帽子屋と毎日ティーパーティ

特徴：茶色いウサ耳とじっぽ。着物、黒い目

帽子屋

年齢：21才

身長：177cm

性格：自分主義者。（自己チュー）喋り出したら止まらない。自分の意見は曲げようとしない（こじら辺がチョシャ猫と合わない）。きっとお金が底をつくまでお茶会をしているだらう。無神経なB型

特徴：金髪、エメラルドグリーンの瞳、お洒落なシルクハット

眠りネズミ

年齢：7才くらい

身長：120cmくらい

性格：とにかく寝てる。かと思いついたまごすむじこしげコロが（あんまりないけど）

特徴：あるいは茶色の耳にじっぽ。服は着ぐるみパジャマ



## ～キャラ紹介～（後書き）

その他の方たちは出てきたところの後書きでお知らせしようつと思います。

とつあえず、帰る方法はわからず終いでその場は解散になりました。

「あ、そうだ……みんなに行つておきたい事があるの……」

「「？」

全員アリスに向き直る。

「あのね……今は家族がいないんだけど……一年ぶりにしたら帰つてきちゃうと思うの……だからそれまでがタイムリミットだと思って? 住んでここつて言つたの? めんなれこ……」

す「」べ申し訳なさうな顔でつむくアリス

「あ、はい」

「いやが不安げに頷く

「大丈夫だ、アリス。それまでには見つけるから」

三月が心配かけないよう言葉をかける

「それにね…」

「…？」

何かと思いチエシャ猫を見ると

いない

「…え？チエシャ猫？」

「…え？チエシャ猫？」

声のした足下を見るとピンクと紫のボーダー柄の猫がいた

「…え？チエシャ猫なの？」

「そうだよ。眠りネズミがあの姿だからなれるかなって思つたらな

れた」

「ヤツとしてヒラコとアリスの膝の上に乗つて言った

「…でも」

「大丈夫。たぶんみんなれるから…おつと論外な人がいたね」

帽子屋を見ながらチエシャ猫が言つ

「ん~どうしたものかねえ」

「帽子屋はそのままですかねえ…恋人とか?」

「田つわわ…それはどうかと…」

「なんだい?…三月は私の配役に不満があるとでも?…」「まあまあ」

アリスがさえぎる

「それは後々考えよ」

「それよりも手掛かり探さなきや…」

「む…そうだな…」

「心当たりなんてありませんしね…」

「…図書館とかにあるかな…？ないよね…」

「図書館か…手掛けりはあるかもしないな明日にでも行ってみるか？」

「やつしましょうー！私もそろそろ学校あるし、宿題も終わらせなきゃー…」

「…がつじつ…」

うなだれるアリスに三月が尋ねた

「え？ 同じ歳くらいの人と一緒に勉強する場所だよー？ そっちにはないの？」

「ないな。こっちにはそんなものがあるのか…」

「うんーひとそれだと思つけど楽しいよーー！」

「そりゃ」

ふつと笑う三月

あは～和むわ…

と幸せそうな顔を浮かべるアリス

「とにかくアリスー！」

「へ？ はー…」

「待てど暮らせビタ食が出てこないのだがまだなのかい？！」

「……せ？」

帽子屋に名前で呼ばれたことの違和感とともに皿の中なことに凹感  
い一瞬理解出来なかつた

「帽子屋…夕食は作らねばないぞ…」

三円が戻れる

「なに？…そなのかい…？…そつゆひ」とせ早めに言つたまえ…。

「えつゝじりめんなわこつ」

反射的に謝つちやつたけど…私悪くないよね？！

「過ぎた」とはい…！…来たまえ…！…夕飯を作らうではないか…！…  
そつ言い、キッチンへ帽子屋が私を引きずつていつた

「アリス…！」

「ひあい…！」

「キッチンはビンだい？…案内したまえ…！」

んな…

帽子屋についていけるのか不安になつた私。だつてA型だもん…見  
るからにB型じやん…帽子屋…



16日 金 ひじて夜は更けてゆく

「うまい！！」

帽子屋が作ったハンバーグを食べて信じられないといつ顔をしているアリス

今なにをしているかって？思つた通り晩ご飯食べてます

「帽子屋の手料理久し振りに食べました～相変わらず美味しいですね！」

「コニコ、はむはむ食べる田うさぎくん。あれ？うさぎってベジタリアンじゃ…つい入っぽいし関係ないのか…

「ほんと美味しいよね…」

真剣にハンバーグを見ながらチエシャ猫が言つ

三月ちゃんはただ黙々と食べてて、眠りネズミくんは小さいサイズのものを作つてもう一三月ちゃんの横で必死に頬張つている

そんなに頬張らなくても誰も取らないって…

思わず笑ってしまう

「ふ〜… 美味しかった！！」

「そう言つてくれると光栄だね！！作り甲斐があるとこつものだ！」

なんか帽子屋がランランしている

「じゃあ俺片付けてくるね〜」

「あーー私もーー」

まとめであるお皿を持ってスタスタと歩いていくチエシャ猫を追いつ

「ん〜？別にいいの〜〜」

「いやーー私の道理がゆるもなこからーーー！」

「やうなの？」

「うふーーー。」

「ふうん? じゃあ洗い終わったお皿拭いて片付ける係りね」

「ううん?」

普通違うじゃないか? と呟つたが頷いておいた

お皿を拭いているとチョシャ猫に声を掛けられた

「アリス…」

「…え?」

「なんで拭くだけなのにそんなにビシショビシショになるの?」

「え? 普通なんない?」

「なんないなんない」

食器を洗いながら横田でアリスを見るとなぜかビシショビシショだった

「えへ……？」

「どうやつて来たの……？」

「ふ……ふつう……」

「ん……」

眉間にシワをよみがねるチエシャ猫

「アリス……」

「ひゃやつ……」

拭き方について悩んでこないとこつ入ってきたのか、突然帽子屋に声を掛けられた

「なんだね？ その叫び声は……まるで猫みたいだね……おつと失礼……」

チエシャ猫は無視で洗い物を続けている

「……と、こんなことを言つにきたわけではないのだよ……。」

「はいへ。」

「お風呂を借りてもいいだらうか？」

「あ、いいですよ～好きに使つて～」

「本当かい……とつあえず沸かし方がわからな～からつこってきたまえ……」

そつまにアリスを引きずりてゆく帽子屋

「一旦に向回やれば氣が済むんだろ～か

その場にまだちやんと立つてたもいた

「えつと、このスイッチを押して、この上下キーで温度調節すればOKです……」

「なるほど……ありがとつアリス。もう行ってくれて構わないよ～！」

「……はあ～」

「ただいま～？」

「ん？ おかえり～」

見るとチヨシヤ猫がお皿を拭いてしまい終わったところだ

「終わっちゃったの？」

「うん。見てみ～全然濡れてないでしょ」

胸を反らせたポーズで両手を広げてみせる

「ん～…なんで？」

「考えてみたけどたぶんアレじゃない？拭くときこ目に溜まつてた水がぼたぼたぼたつと」

「え？ みんななんないの？」

「なんないなんない。まあ無事解決だね～必要なのは注意力かな」

「む～…」

片付けも一通り終わったのでソビングに戻る

ソファに座りながらテレビを見てくる垣ちゃんがいた

「ん? アリスか

「何見てるの? 」

「ああ……わからんな

「ふ……ふむ? 」

ふたりでテレビに釘付けになつてると、ソファにドスッ とゆう音  
が響いたチエシャ猫だ

「あれ? 田つやあひ寝りネズミは? 」

そういえば見当たらない

「ああ、あいつはなら隣子屋と風呂に入つているぞ

「え? 」

「ふーん? 男同士で入つてなにが楽しいんだか……俺なら女の子と入  
るの? 」

「はあ？！」

思いついた顔をよせるアリスと呆れて黙る三円

「ん？ なんならアリス、俺に入る？」

「は？ ヤダー！ ひとりで入れ！ ！」

「そんなに拒絶しなくとも… 隅々まで洗つてあげる

「なつ… 変態…！」

置いてあるソファを投げ付ける。あははと笑い避けるチョシャ猫

「アリス… 相手にするな」

「ん… うん？」

三円の横にアリスが座る

「ひどいなあ～」

チョシャ猫まだケラケラと笑っている

「おや？ なにやら騒がしいね？ ！」

「お風呂いただきました～」

お風呂をあがつた三人が入ってきた

「じゃあ俺入るつと」

スタスターと部屋に向かうチホシャ猫

部屋から出でると

「覗いちやダメだよ

「誰も覗かないから……」

やつらこの風呂へ去っていった

遅くなつて申し訳ないです（――・）  
ではではお待たせしました  
ビギー

たくさんの本、棚が立ち並び、それに伴つたくさんの人達。夏休みとこゝにあるのだらつ、こつもは静かな図書館はザワザワと賑わつてゐる

その中、アリス達は案内板の前で立ち尽くしていた。

「…ビリ探せばいいんだろ？」

来てみたはいいものの、ビリを探せばいいのかわからない

「とりあえず…不思議の国の本を手当たり次第探し当てればいいんだよね…童話かなあ…」

四人は童話コーナーに向つて歩き出す

「ダウフとはなんだ？」

三月が話しかけてきた。見ると、その後ろ辺つで立つてゐる少女を見上げている

「え？」

「俺の国では、ダウフ、なんて言葉がないからね。知らないんだよ

チエシャ猫が説明する

「あ、そりゃんだ……えつとね……物語つてわかるかなあ……？」

「うん」

「あ、それなら早いや。物語をね、子供向けにした感じ?」

「ふむ……」

「子供向けの絵本みたいなのですか?」

「そんなのだと思つたけど……今度調べとくよ」

「あ、わざわざすみません」

ハタつと慌てて由つわくへんが謝つた

「いや、謝る事じやないから大丈夫だよ~」

アリスが笑つて返した

「アリス、とてつもなく大量にあるんだが……」

「少しでも使えそうなやつは持つてきてくれ

「お姉さん、これとこれをお…」

「はいはーい。じゃあこれに入れかけつけて

持っていた図書館用の袋を広げる

「アリス～これ借てもいい～？」

チエシャ猫が歩み寄ってきた。

「それ料理の本じゃない…」

「今日留守電してたる帽子屋のためなの…」

「そんなこと言つてお前が読みたいだけだらつ

本を選び終えた三田が口を挟む

「バレたー？」

あはーっと笑うチエシャ猫

「これで今日は終わりにしつか。仕方ないからチエシャ猫も借りるなら入れて」

パツと顔を明るくするチエシャ猫

「わあい ありがとアリス大好きー！」

アリスに抱きついて喉を「ロロロロ鳴らす チェシャ猫

「ー！」

びっくりして身体を強張らせるアリス

「いらっしゃー！ チェシャ猫ー！ 人目につかないとこでやれーー！」

ギョッとした顔で チェシャ猫に注意する三月

「えー？ じゃあ人目につかなきやいいんだね

「ん？ まあいいんじゃないか？」

ふたりのそんな会話の中、全く動かないアリスを白いつきあいくんが顔  
を覗きこんだ

「……おねえさん？」

アリスは顔を真っ赤にして硬直している

「アリス？！ 大丈夫か？ 真っ赤だぞーー！ 熱でもあるのかーー！ 病院  
に…いや、自分が…」

「えーーあーー大丈夫だよーー病気じゃないからーー。」

慌てふためくふたりの後ろで声がした

「コホン。館内はお静かに。」

いかにも教育ママさん的格好をした図書館員さんに睨まれた

「「「」…「」めんなさい」」

「それと、閉館10分前ですので、借りるならお早めに」

そう言い残し、立ち去っていく

「じゃ…じゃあ借りてくるね」

「あ、ああ…一緒にいく」

「え、待つてたら?」

「いや、アリスがいないときがあるかもしないしな

「あ、そつか…カウンターに本と貸出カードを出すだけなんだけど…じゃあ一緒にいづか」

「コッソリ微笑みかけるアリス

「ああ」

と、三月ちゃんが頷いた

「結構簡単でしたね～」

「帰り道、由うわさくんが話しかけた

「でしょ～。これからは一人でも大丈夫だね」

笑いながら話すアリス

もう六時になるといつに辺りはまだ明るい

「帽子屋怒ってるかな～」

「ヤツと笑うチョシャ猫

「いや、たぶん平氣だらつ...コレもあるしな」

「せつを言つてた...帽子屋に留守番をせると暴れ出すつて本物...?」

不安げに尋ねるアリス

「それは飛躍しすぎだが、まあお土産買って行けば大丈夫だ。」

「そつか なら平氣だね～」

「帽子屋、それ好きですかうね～」

「ああ」

「そついえば、それなんなの？」

「これは…」

「帰つたらのお楽しみだよ」

三月の言葉をチョシャ猫がむべさる

「え～…」

アリスが不満げな声をあげる

「まあ、帰つたら教える」

「うふ…」

素直なアリスを見て三月が微笑んだ

1-8 四三 アリス、ドキドキ ハラハラ… 感怖の一夜

「…やああああああ…」

アリスの悲鳴が屋敷中に響き渡った

高笑いをする體子屋

眠る眠りネズミ

オロオロしてこむ白いつねめ...

何かに魅入ってしまった二月...

この屋敷に一体なにが起いったのでしょうか...

由つやきが心配でアリスを覗きこんでいる

「おねえさん大丈夫ですか……？」

アリスなどお構いなしだ

中身は半分取り出してあり、ひとつは二月が釘付けになつて少しいじつたりしながらも魅入つてゐる

アリスは二月が帽子屋に手渡したソレを見て悲鳴をあげた

「こ……いやあああああああ……！」

ふう…アリスは「」の物語が始まつてから「」心配されるのは何回目なんだろ？…

「田つわわわへう そつ…」

アリスが泣きじゅくりながら「」に助けを求める…「…」  
「あつわ…」  
「田つわわわ…」一緒に観賞しないかい？…これがまた素敵そうですね  
「…」

高笑いをしながらあまりにも興奮し過ぎてこの帽子屋に弾き飛ばされるアリス

「イタタ…」

じつやう頭をぶつけてしまつたようだな

大丈夫かい？アリス

アリスは頭を押さえながらもむくつと立ち上がる

そのアリスの田に飛び込んできたのは二月がソファに座つて見ているソレだった

「あやああああああ…」

もはや涙は止まらない。

アリスが今までずっと見まいと努力していたものが水の泡となつたの…

そんなアリスを知つてか知らずか帽子屋は興奮して鼻息を荒くしながらだいぶ年下の白いさきにソレについて熱く語つてゐる

白いさきももともとソレには興味があつたらしくアリスのことは何処へやら夢中で聞き入つてゐるようだ

今の状況を表すならそつだな…

『アリス…THE 放置』

この言葉がピッタリだな、うん。

「みんなひどいよ……」

「うう……と悲痛の声をだすアリス

「お財布渡してなにか買つてきたと思つたらさ……中身教えてくれないし……帰つてきてションボリしてて帽子屋にさ、ソレを見せた途端嬉しさのあまり発狂するしわ……突き飛ばされるわ、シカトされるわ、放置だし……みんなひどいよ……なんでそんなにソレがいいのよ……」

ブツブツしゃべりながらアリスがいじけてる  
……が、そんなことはお構いなし

「もひ……なんでそんなものがいいのよ……おかしいわよ……」

瞳いっぱいに涙を浮かべながら抗議するアリス

そいぢやつと帽子屋が反応した

「……そんな……もの……だと?」

笑みを浮かべながらの般若のよひな表情で帽子屋がこひらをくわう  
りと振り返る

「ひつ……」

あまりの恐怖にアリスは引かつた声をあげた

「これのビリーを見てそんなものと呼べるんだい？！ビリーをビリー探し  
てもこんなに素晴らしいものはないね！…それをそんなものと呼べ  
る君の目は節穴さ…腐っているよ…出直してきたまえ…」

間髪いれずまくし立てたあと、シッシンと手で追払う仕草をする畠

子屋

そしてすぐニ「ああ悪いね」と畠の腰にまた語り始めた

アリスはとこづと拳を硬く握りふるふると震わせていく

「もう知らないんだからっ…みんな出てかー…」

キッと畠子屋を睨み付け、ダダダーッと走り去ってしまった

「少し…せつ迺なでな…」

おつて行くアリスの背中を見つめる畠の腰

「ん？ああ…」こつかこ…こつかねえ…

「え…あ、いえ…」

話し始めた畠子屋は止められないで再び聞き入る畠の腰

三円は気付いてこのかいなーのか…見る限り氣にも止めていない

よつだ

「うわああああんーーー！」

アリス的最終手段を使つても止められなかつたアリスは自分の部屋に戻ればいいものの、適当に近場の部屋に入つていつた

もちろん作者の作為的に

「なこよつ…みんなして…」

ドアの前でうずくまり縮こまるアリス

「…どうかしたの？アリス？わざわざ俺の部屋にくるなんて

誰もいないと思い込んでいたアリスはビクッと肩を震わせた

「アリス？」

「チヒシャ…猫」

顔を上げるとジーパンに半裸のチョシャ猫がいた  
今まで寝ていたのだろうかとこうびじう寝癖がついている

「泣いてるね、こりあけひじで」

寝ぼけた顔をしていたがアリスの異変に気付いたのだりつ  
手を引いてベットに座らせた  
アリスはもう、されるがままだ

「なにがあつたの？」

アリスの横に座り頭を撫でながら尋ねる

「…みんながね…ひどいの…」

しゃつべつまじつの震えた声で話すアリス

「へえ？」

「あたし…ホラーダメだつて言つてゐに見向きもしないし…あた  
しそつちのけでお構いなしだし…白つさがく今まで放置だし…終い  
には帽子屋に追い出されるし…」

やばい……また涙出しきた……

袖で涙を拭ぬぐつたらとチヨシャ猫に顔を持ち上げられた

ぐー

えつ

「ひやー…」

涙で視界も思考もがぼやけていてなにが起きたのか一瞬理解できず

湿った猫のよひにザラザラした舌のよひなもので涙を舐めとられた

「やつ……ちよ……なに……」

チヨシャ猫から離れようとグツと胸の辺りを押す

「じつとじてよ」

わざわざまでの落ち着かせるよひな声とは違つ……ゾクツとくるよひな

声で囁かれたと思えば

両腕を頭の上でまとめて上げられ

ドサッと

ベットに押しつけられた

「……え……ちゅう」

まだ舐め続けようとするチノシャ猫に抵抗しようと腕を動かすが無駄で  
避けようと顔を背けるも片手で向き直られる

まだ少し動かせる足をバタバタと動かしながらギュウッと皿をつぶると

足が不快だったのか馬乗り体制からの掛けられた

ふと、顔にあの舐められる感触が無くなつたのであわてて皿を開けると

ジッと見ているチノシャ猫と皿が合つ

みるみる顔が赤くなるのが自分でもわかる……いや……仕方ないよ……  
うん……あんなことわれちゃ……

パツとチョシャ猫から田を逸らすと

「泣きやんだねえ、よかつたあ」

安心したような、すく優しい声が聞こえた

「え……」

見るといつと笑っているチョシャ猫の顔が……

落ちて来る最中だった

「ぐー」

真横に倒れたチョシャ猫は…吐息をたてながら眠つについた

びびびびっくりしたーっ

田を見開きっぱなしのアリス

…とりあえず落ち着け

深呼吸

すーはーすーはー

「ふう…」

静かになつたな…

隣りの部屋から流れて来る音声以外静かなものだ帽子屋も見入つて  
いるのだろう

とつあえず……動けないし……

チララッとチャーシャ猫を見るが動きそうもない

寝よう。

危害もあつとないだらうと思つて、なによつも漏れて来る音から逃げたくて……

アリスは目を閉じた。

おやおやふたりとも……そんな格好で寝ては風邪引くだらう……布団をかぶせてあげようか

ひんぴこひん

よし、おやすみアリス。良二夢を

自分で期限決めてるにもかかわらずすっかり更新が遅くなっています…

直さなきゃ…。rene

今回チエシャ猫の服をはだけたパジャマにじょうがジーパンに半裸にじょうかで悩んでもました（そんな無意味な）

まあ結局一度してみたかった半裸なのですが…

あまり意味はあつませんでした（^—^;）

では今日はこれにて失礼します^~^

「お皿皿ベジトにてぬのはまだあれだ? (前書き)

大変遅くなりました

申し訳ござりません (――;) m

「お母さん、何がいいの？」「何がいいの？」「何がいいの？」「何がいいの？」「何がいいの？」

ひがひがひがひ

「ん…」

小鳥のさえずりとカーテン越しの朝の木漏れ日に日が覚める

……予定だった

だが実際アリスはあまりの窮屈さに日が覚める

なんでこんなにきついんだ…

確か昨日はチエシャ猫と…

えつ…もしかしてこの後ろから抱き締めてる手はチエシャ猫！？

少し赤くなりつつ、とつあえずベットから出ようと、横向きの体制からぞもぞ動くと、なにかお腹の辺りにあたる感触…。

空いている両手で布団をめぐり見ると、それは見慣れたピンクと紫のシマシマ…マ…

え？ チョシャ猫？ 可愛いなあ……」「んなペット欲しいなあ……ん？ ちよつと待てよ……猫になつてゐる……？ てことは？

「後ひの誰よ……？」

考えられるのは幡子屋と二円ちゃん

大きや的に考えて白いつわくくんはないし……  
けど……抱え込まれてる」とを考えると……ほーし……や……？

うげ……不快。

てゆーかなんでこの部屋にいるのよ。リビングにいたんじやなかつたのー？

よし、昨日の恨みもあるし氣を使つ必要もないな……腹パンチでも食らわしてやる

ゴスツッ

考え付いたと同時に後先考えず肘鉄を後ろ目掛けて放つアリス

「ガハツ？！」

……  
……  
……

……え？誰？

……聞こえた声は癪にさわる帽子屋の声ではなかつた

なーんか聞いたことあるような無こよつた

「あ”ー…？」

頭をボリボリかきながらむくりと起き上がつた…その男は数秒の間をあけた後ハツとしたように声をあげた

「つ……ヤベつ……そのまま寝ちゃったのか俺……？」

頭を抱え込み、ざわざわ……ざわざわ……とひといで焦つてこないみだ

「……？」

なんか見覚えが…

「……縁……兄ちやん……？」

「……」

呼ばれた彼は体をピクッと硬直させながら、恐る恐る「ひらり」を振り返つた。

「や……やあアリス? 田原めはいががかな……?」

「ひつと笑顔だナジ青ざめてるよ……

「……それより……なんで」「アリス……」

「こやつ……われは……」アーノルド

「…………？」

うわーっアリスの眉間にシワが…  
ヤバイヤバイヤバイヤバイ

「こ、こ、こ、いや、下心があつたとかじゃないんだっ…！ただ、

人肌恋しかつたとゆうか…って違う…！違つ…！ジョークだ…！  
アリス違つんだ…！お願いだからそんな気色悪い物を見るような目  
で見ないでくれ…！そんな端に…俺から距離をとらないでくれ…！  
！…」

腕を伸ばして待つてくれーのポーズ…今にもなんか泣き出しそうだ。

「…ふふふ…」

その光景に思わず笑つてしまつ

「え？」「とゆう表情でこちりをみる彼

「こや、前にもこなことあつたなーと想つて

ふふつと笑いながら話すアリス

「げ…マジかよ…？」

「そんな」とあつたかなあ…とあげていた方の手を頭にもつていく

「あつたよ…、確か私が小学生のとき…かな?お兄ちゃんが私のベットに入つてた縁お兄ちゃん見つけて

「お前は口リコンかー!!!!!!」つて

「…あははー」

思い当たる節があるのか苦笑いしている

「…ヒルダ、アリス」

「ん? なに?」

「枕元にウサギがいるんだけど…飼い始めたの?」

「…え?」

バツと上にある枕元をみると確かに茶色いウサギが寝息をたてている。なんて無防備なの…撫で回したい…

「…」

「…アリス？」

振り向いてからの長い沈黙に不審に思つたのか彼が声をかけた

でもなー、寝てるの邪魔しちゃダメだよね…我慢よアリス…ああ…でもなにあのふわふわな栗色とも言えない茶色…撫で回してくださって言つてるようなものだわ…ああでも…

「アリス…！」

「ぴょ…！…？」

あれ？私、今変な声出し…た？  
恥ず…！…！

「ぴょってなんだよ…で、あのウサギは飼つてないの？じゃあ山に返しに行くけど？どうせアリスは無類の動物好きだから返せないだろうし？」

「あつ…えつ…！」

これはマズい…！…バレるわけにもいかないし捨てられたらそれこそどうなるかわからんない…！

「あつ…！…違うの…！…友達…！…そう、友達から預かってるの…！」

手をバタバタ動かしながら咄嗟の言い訳を口走る

「……へえ？」

「ヤバい……絶対不審がられてるよ……  
案の定彼はアリスに質問し始めた

「その友達はいつ帰つて来るの？」

「えと……、一年後くらい？」

「長いなあオイ……

「お父さん達もそれくらい帰つて来ないって連絡あったし……いいかなあ～って……」

「赤は？」

「おねえちゃんはね、一年くらい友達と旅行行くんだって

「ふうん、で、そのウサギは誰から預かったの？」

「……おねえちゃんと旅行に行つてる友・達……」

アリスの目線が泳いでいる

「ほほづ。じやあ今から赤に電話して確かめて見ようか

「えつ……」

壇だめた

「ん? なんか問題でもあるの?」「え...いや...」

「やうやく...」

耳に携帯を貼てる彼

「あ、もしも...」

「...」

奇声をあげながら彼から携帯を奪いつつた

「おねえちゃん!...違ひの...」

すかさず耳に携帯をあて話出す

「アリス」

「これには色々と詮が!...」

「アリス」

彼が肩をちょちよごと呂く

「なによーーー!」

半狂乱になりながら彼を振り返る

「画面、見てみ」

「え？」

「画面。」

む、一としながら携帯の画面を見ると

S  
A  
•  
D  
A  
•  
K  
O

## 「うは。良い反応」

## 当然通話中の訴もなく

なにすんのよ!!! 信じられない!!! 驚いたのね!!! 出でけ!!!

涙ぐみながらそいりへんにある時計やら枕ならを投げ付け追い出そ  
うとするアリス

「ちょー！ 痛ー！ わかつたー！ わかつたからー！」

わかつたなら出てけ――――――――

「痛い！！目覚まし痛い！！わかつた！！出でくからヤメッ！！痛

! !

ドアまで追い詰めたアリス

「はあつ…はあつ…」

「ちよ、まあ落ち着け……出て行く…部屋から出て行くから…これだけは聞いてくれ…」

「……なによ」

田覚しを片手にあげて、いつでも投げられるポーズ

「ウサギに肉球があるって本当か?」

手をわきわきさせながら真顔で言われた

「ないわ――――」

「ひおひ――――」バタン。ゴン。

「……まあ…品種によつてあるのもくるんだけど…とにかく、人の姿の時に見つからなくてよかつたあ…」

ふうつとため息をつくと後ろから声が聞こえた

「…ひたく…朝つぱらからひつむれこなあ…」

「あ、ごめんチョシャ猫」

「こ、よ別に」

くわっとあくびをする

う…のんきだけど口調が怒つてゐる…

「それにしても、奴は何者だ？」

いつの間にか横にいた茶色いウサギ…三月が問い掛けた  
たぶん、さつきの騒がしさで起きたのだらつ。「ごめん。

「んとね、お兄ちゃんとの友達だよ。よく一緒に遊んでたんだ

「ふむ。」

「それよつ、…なんで三月ちゃんたち動物になつてゐるの？」

「ん? なに?…一つの間に…」

その反応だと今気付いたのだろう  
チョシャ猫もそつみたい

「昨日の夜までは平氣だったのにね?」

三月の身体が一瞬光つた。  
しかし、その光も一瞬で弾け飛ぶ

「むへ、…むむ?」

「え? どしたの?」

「戻れない…ね、」

「うむ、」

「え……」

三人の間に妙な緊張が走る

「まあ、 いの姿でも問題はないし、 いいんじゃない?」

チエシヤ猫がため息をついた

「まあ、 それもやうだな……あ?」

「あ? どうした?」

「アリス、 先ほどの奴はどうしている?」

「え……たぶんリビング」

「田代やうと幡子屋はどうしている?」

「え……あ……」

「最後に見たのはリビングだ。 バレたら色々とマズいんじゃない?」

「うひっすうひ……お兄ちゃんに伝わる前に口止めしなやや……」

「とつあえず、 急ぐぞ……開けてくれアリス……」

「俺も。場所には困らないけど、猫社会は面倒だし、家がある」「したことはないからね」

「アリスがドアを開け、三人（？）で駆け出す

「……あ、猫のままで家にいれば問題はないのか…」

走り出してすぐ思い付いたようにチョシャ猫が叫ぶ

「うちんちペット禁止なの…」

「野良猫が居着いたとか」

「お母さんが帰ってきたら殺されちゃうわよーー！動物大っ嫌いだからーー！」

「うげえ…」

「待て、大丈夫なのか？」

それを聞いていた三月ちゃんも話しづはじめる

「なにがつ」

「臭いとか毛とか」

「帰つてぐる前にあなた達を返せたらなんとかなると想つーー！」

「とつあえず今は田の前の問題つてね」

リビングのドアが見えてきた

走っている勢いに任せてアリスは思いつきドアを開けた

## 20日目 おバカさんが一人…

開け放つたドアの先に広がった光景に…アリスは息を飲んだ

だつて…動物姿ならまだ“まかせるけど…

人型だと、いろいろ問題が起こるはずじやないか。

例えば、家族がいない間に男を連れ込んで…！  
とか、まあよくあるパターンだよね。

なのに…

なのに…

なんで呑氣にお茶飲んでんのよつ？！

少しあんなかないわけ？！

「どうなのよーーー！」

「ん? どうしたんだいアリス? 息を切らせて」

「どうしたって…」

バレたら大変だつて思つて焦つてた自分がバカみたいじゃない…

なに…この無駄な努力…

なんか呆れたら疲れてきたな…

「…アリス、大丈夫か…？」

私にも聞こえるかわからないうらうの声で三月ちゃんが話し掛けた

「うん…」

アリスは縁から見て不自然じゃないよう頷いた。

三月ちゃんがバレる危険があるにも関わらず話し掛けたんだ、余程疲れた顔をしていたんだろう

私は、はあ…と溜め息を着いて空いているソファに腰掛けた

テーブルを挟んで向かいの三人掛けのソファには帽子屋

そのふたつのソファの間、テーブルの端のひとり掛けのソファには

縁が座つてゐる

三田ちやんは帽子屋の方へ

チヨシヤ猫は私に着いてきた

「疲れた顔をしているね？大丈夫かい？」

「ん~大丈夫」

「さつあまではなんともなかつたのにね？お兄さんが癒してあげようか？わあ……」

やつぱり両手を広げる縁

「ん~遠慮しない

「なんで？…小さい頃は飛んできてくれたのに……」

ショックを受けた顔をして両手を広げたまま固まつてゐる

「つーか、疲れた顔の原因はお前じやー……それに向年前の話よ……はあ……」

呆れて言葉も続かない

「年上に…仮にも兄ちやんの友達にお前はないだら、お前は……」

「お前なんかお前で十分じやー……うわーん」

「……ヒ、まあ、そんなことは置いといて……」

ほんといい性格してるとよな」「イツ……

アリスがわなわなと拳を震わせる

にも気付かず縁は話続けた

「……わっせ、そのウサギ喋つてなかつた?」

辺りが一瞬沈黙した

アリスは始めは言葉の意味を理解していなかつたが今はどひしよ  
とむひ顔のまま固まつている

三円ちやんなんて冷や汗ダラダラで逃げ腰だ

時間的には数秒…

私達にはとても長い……

その沈黙を破つたのは帽子屋だった

「君はなこを言つているんだい?」

みんなの視線が帽子屋に集まる

「常識的に考えてウサギが喋るはずがないだろ？——墨鏡で変になつたんじゃないかい？」

「ん~…まあ、それもやつか…」

少し考えながらも納得する緑

帽子屋に常識を説かれたくはないが、この時ばかりは感謝した相手が納得したのに三円ちゃんも安心したのか帽子屋の膝の上でくつろいでいる

アリスの顔もほほとした表情になつた

そんなアリスに気付いた帽子屋はアリスに向かつてワインクした

「私だつて役に立つだらう？~

と語つているのが聞こえるようだ

アリスはそんな帽子屋に向かつて笑いかけた

「え？なになに？なんでそ~い雰囲気だしちやつてんの？実は付  
き合つちやつてんの？ねえねえ」

ちょっと雰囲気が変わったのを緑が察知したのか興味深げに聞いて  
きた

「うう…付き合つひなんか…！」

「ありえないね…！なぜ僕がこんなちんちくつんと付き合わなければならんんだい？！僕にも好みとこつものがあるのだよ…！」

「んなあ？！」

少し顔を赤らめたアリスが帽子屋の言葉に別の意味で赤くなる

そんな事も気にせず、縁は帽子屋に疑問をぶつける

「で、やじなことしたら、なにって今のやつとつへ

「それはだねえ…！」

興味津々とゆづ彼こ、帽子屋は血運ナビで答える

「三円が喋つたことをつまく誤魔化せたからさ…。」

「帽子屋ああああああああ…！」

……ほら、さつきもかばつてくれたわけだし？少し不安を残しつつも、そこまでバカじゃないだろ？と信じて見守つてたんだよ？

なのに貴様ああああああ…！

私と三円ちやんは跳ねるよつて立ち上がり声を張り上げた。

「あ、やつぱり俺の姫耳じゃなかつたんだね～」

ハット帽を傾け、顔を隠してつむぐ帽子屋に対し、縁は満面の笑みだ

はあ……これからどうしよう……

私は溜め息をついた

20日目 おバカさんが一人。（後書き）

ごめんなさああああああああい  
。 。 (。 。 。 ) 。 。 。

取りあえず、縁は夕飯を食べて行くことになった

今までの事と進行状況を話していたら長くなってしまったからだ

今日のメニューは帽子屋の作った野菜たっぷりカレー。

本人曰く、夏バテ予防はバランス良く食べる事だそうだ

三円ちゃんとチョシャ猫の分も盛つてあるけど…食べて平気なのか

…?

「ふ〜ん、そんなことがあったわけね〜」

カレーを口に運びながら、一通り聞いた説明の感想を漏らす

「けど、家族が戻つてくるのは一年後くらいだろ?それに、あくまで予定だからもつと早いかもしれない。帰り方がわからないまま帰つてきたらどうすんだ?」

「…」

縁の言う事はもつともだ…思ひはしたけど考えないよつとしてたこ

とをバツサリ言われる

「俺は助けられないぞ?」

「わかつてゐわよ…」

緑を一睨みすると田があつた。

最初つから助けなんて求める氣ないし。

自意識過剰めジガジョ…

と、心の中で呟いた後、田線を逸らす

食べ終えたらしい緑がスプーンを置く

かといつ私はまだ半分くらいしか食べれていな

「気にかかる」とはない、なるよりこじかならないのだから

帽子屋がすまじて言つ

「こつ… わたしの血分のこと言つてゐるだろ…

「そうだとしても、一番被害が出るのは君達だよ? あの人の氣分が悪かつたら殺されかねないし… ねえ、アリス?」

「わの母をなんだと思つてんのよ…」

「え? 女王様。」

「ノノヤロー」

ピクッとチヒシャ猫と二田ひやんの耳が動いたのを私は見逃さなかつた。

帽子屋も様子は変わつていなによつて見えるが、少し田付きが変わつた

……え？ なに？

なに？ この雰囲気？

「ん？ 僕なんか言つた？ アリス、 麦茶おかわり

そもそも当然といつように麦茶の入つていてボトルを差し出す

「自分で取りに行きなさいよつ食べ終わつてるんだからつ……」

「いいの？ 僕にそんなこと言つて… お兄ちゃんほりじめやうよ  
？」

「う…ノノヤローッ

「～～つ… 取つてくればいいんでしょつ…」

ボトルを奪い取り、 ドスドスと音を立ててアリスはキッチンへと消えていった

「さて、 邪魔なアリスが消えたといひで… 話を始めよつか。 … 不思議の国の諸君？」

「　　…　？」

目付きの変わった縁に三人(?)は身構える

「ああ、アリスなら心配いらないよ。しばらく戻つて来れないからね」

「お前は一体…」

二円の問には縁に遮られた

「おつと、先に質問するのは俺だよ？君達が勝手に落ちてきて予定を狂わせてくれたんだからさ～」

フツと皮肉めいた笑いを見せた

その姿はいつの間にやらシルクハットに燕尾服の姿に変わっている

「ふんつ、怪しいと思つてたんだよねえ…この状態じゃアリスのとこへも行けなそудだし、この空間隔離してるでしょ」

「ああ、無駄な努力はしないほうがいいぜ？どうせお前らだつてまだ人型に戻れねえだろ？」

「ふうん…アナタのせいだつたんだ？この借りは高く付くよ？」

「ふん。やれるもんならやつてみな」

睨みつけるチエシャ猫に対して不敵な笑いを見せる

「ふう…ぐだらない茶番はどうでも良いのだよ。」

一人の間に帽子屋が割って入った

視線が帽子屋に集中する

それを確認した後、縁を見据えながら帽子屋が話し出した

「さて、諸君。本題に入ろうではないか。…君の質問はなんだね?」

組んでいた足の上に軽く手を組んで乗せた

「偉そうな態度は昔から変わらないなお前」

鼻で笑いながら話を続ける

「なつ?！」

帽子屋が声をあげると、またも縁が遮った

「お前が俺のこと知らないのは当たり前だからな

そう言った縁に怪訝な顔をする人々

「さて、本題だけど…」

三人がゴクッと息を呑む

「あ、いやいや、そんなに緊張しないでよ、今向こうがどんな状態か聞きたいだけだからねー?」

軽い言葉を装つてはいるが、田は少しも笑っていない

「それを聞いてどうするつもりだ?貴様が何者かもわからなまま答えられるわけ…」

「だからね、」

縁がパチンと指を鳴らす  
途端、三月が喉をおさえた

「…?…」

「ちょっと黙つててつてば」

三月は縁を睨みつつ何事か喋つてこるみうだが声が出ていない

「貴様…三月になにを…」

「だーかーらー、話せなくよつこしただけ。今の流れからきて分かるでしょ?空氣読めよな~キミが答えてくれれば解いてあげるし、質問にも答えてやるからさ」

こんな人質とるつもりなかつたのに~  
と呴きながら、背も垂れにドスツとよつかかる

「で？話すの話さないの？」

「…別に隠す事でもないんだし話したら？」

今にも飛び掛かりそうな帽子屋に向かってチョシャ猫が促す

「……今の向こうの状況だつたな…」

「ああ。やつと話が進みそうだな～」

話し始めた帽子屋を縁は笑顔で見る

「！」の私が分かりやすくシンプルにまとめてやつではないか

ふんつとイヤミつたらしく言い放つ

「城にいた女王と芋虫、公爵、そして赤薔薇と白薔薇が消息不明だ」

「…そんなことはどうでもいいから、状況だよ内部事情…国全体  
はどうなつてゐるか聞きたいのー」

言葉足りなかつたねー悪い悪いと軽く言つ

「そんなもの、由ウサギが管理してなんとかなつてはいたが…今は  
知る術もないな」

「ふむ…」

…とこ「！」とは、いるもんいなくて混乱状態の可能性が高いわけだ

それを聞いた緑は少し考えた風になる

それを遮り帽子屋が話す

「それよりも、質問に答えてもらおうか？」

「ん？ ああ、 いいよ。 ふたつね」「

それに対し素っ気なく答えた

「貴様は何者だ？」

「俺？俺はアリスの兄貴の友達だよ！」

「嘘をつくでないよ。じつちの事情を知つてるとこつことは、少なくともこちりに関係があるはずだ。それを答えたまえ」

「やだなあ」「冗談通じない人は」

笑いながらパチンと指を鳴らす

「今度はなにを…つ

「やだなあ）。三月の声を戻してあげたんじゃないかな？」

「む？」と、二月が声を出す

帽子屋がほつとした顔をしたが、すぐにまた敵を見るような顔になる

「それよりも貴様質問に……！」

「はいっ 麦茶っ！」

話を戻そつとした帽子屋の前にドンッと麦茶のボトルが置かれた

見上げるとアリスが戻ってきていた

「おっ！…サンキューアリス！」

縁もいつの間にか前の格好に戻つていた

と、縁の視線がアリスの横に移る

そこには白ウサギが一コツと微笑んでたたずんでいた

「……！」

「おや？白ウサギじゃないか」

「あれ？ずつといた気がしてたけど……」

「……いなかつたのか……？」

三人がそれぞれ口を開き、はつーーーつと、一斉に縁を見る

「やつてくれましたね芋虫さん……」

「ハハハした笑顔を崩さず白ウサギくんがいつもよつトーンの低めの声で喋る

「…………アリス…………どこで白ウサギを…………？」

引きつった笑いを見せる芋虫

え、なんか外から音かしたから窓開けたらいたみたいな……」

ス」

今まで座っていたはずなのにいつの間にか芋虫は庭へと続く窓を開けて立っていた

状況を飲み込めていないのはアリスだけだ

「ううん、おまえがやつてやる」

白ウサギくんが走り出しだが、ドテンっと、なにもないところで転んでしまった

「「白ウサギ（くに）？」」

帽子屋と三月とアリスが叫びアリスが駆け寄つて大丈夫?と立たせる

それを見て芋虫がクスッと笑う

「田中先生のセイウチ♪...嫌いじゃないよ」

そつ言い、芋虫はパチンと指を鳴らした  
ヤバい！…つと思つた時には既に遅く

意識が朦朧とし始め、最後に見たのは、芋虫が「じゃあ、またね」  
「と残して消えていくところだつた

21日 三 芋虫（後書き）

芋虫

身長：170cm

体重：57kg

目：エメラルドグリーン

髪：淡いような深いような緑

性格：おちやらけ。命が関わるとちやんとする（女王の側近）。

白ウサギとは仲がいいような悪いような…  
城以外の人にはあまり知られてない

アリスの家にはよく出没してた（る？）

「ふ……ヤバいやばい」

芋虫はアリス邸の門の前を街に向かって下つてゐるところだ

今みんな寝てるところかな つとクスクス笑いながら

「それにしても……」

「これがあの人達に教えたほうがいいのか悩みどころだな……

女王の側近といえど、何から何まで伝えるわけではない

伝えなければならない事を伝え、その他、スケジュール管理、着替や食事の用意をするくらいのものだ

それに、今、女王は恋人と一緒にいるからやる事など無いに等しい

アリスも手伝いが必要な歳でもないしなあ……

もう16年か……

確か1年で1週間だから、あっちではたかが4カ月程度だろつナビ……

そろそろ国が恋しくなってきたな……

芋虫は歩きながらふと、星空を見上げた。

+

田が覚めるとガツツリカレーの匂いが漂ってきた

「ん……？」

カレー臭…

一番に田が覚めたのはアリスだ

そして、続々と田が覚める全員第一声は「「カレー臭い……」」

あたし、なんでこんなところで寝てるんだ…

……思いだせない…

「むう……」

寝起きの頭じゃなに考えたって無駄だなと思い、テーブルの上に乗つているカレーの皿もろもろを片付けようとする

つーか、なんでカレーが…？

「手伝うよ」

上から声がしたと思つたら重ねて持つていた皿をヒョイッと奪われたところだった

「あ、ありがとチェシャ猫」

そのチェシャ猫は「いゝえー」と言いながらキッチンに消えていった

+

「むー…」

アリスは机に向かい、夏休みの宿題をやつている。が、飽きたのか暑さでダルいのかぐだーっとダレている

チェシャ猫と洗い物をした後、アリスは全員に話を聞いてまわつていた…が、諦めた

昨日なにがあつたか覚えてる人がいないなんて…

「謎だ……」

独り言を呟くと部屋をノックする音が聞こえた

「はーい？」

「アリスへ息抜きにお茶しよ~」

返事をすると聞こえたのはチョシャ猫の声

「うん……」

私は遊んでいたペンを置いて駆け出し熱いよくドアを開けた

バーンッ

ん？なんか当たつた感触が…

「ち……チョシャ猫……？」

「……ハアイ？」

恐る恐るドアを引いてみるとそこには鼻を赤くしたチョシャ猫がいた  
当然私の顔は真っ青。

「『じめんなさい』『じめんなさい』『じめんなさい』『じめんなさい』…」

「いや、大丈夫だから」

鼻を擦りながら私の『じめんなさい』攻撃を遮った

「それより、行こうか」

スッと腕を差し出すチョシャ猫

「…紳士だ…！」

私はすかさず差し出された腕を掴んだ

なんか反射的に

いつも帽子屋みたいなエセ紳士を見ているせいかな素晴らしくかつこ  
よく見える

奴なら絶対「なにをする…私の美しい顔が台無しではないか…！」  
とか文句言つに違いないのに…  
まあ、実際綺麗なんだけれど…

「ふつ」

そんなことを考えているとチョシャ猫に笑われた

…あ、そういうふうに聞こえなんだつた…

思い出した途端恥ずかしくなったのか顔を赤らめる

「そんな恥ずかしがちやつてへ

「…だつてーーー」

「今更じやなーー？」

「うぐい

からかいつよくにチニシヤ猫が話す

むう…からかいつるーーーの人（？）からかいつるーーー

「アリスつて面白こよねー

「なにがよつ

「思つてゐるじがまんま顔に出てるんだもん

ほひまたーと書つて空こでいる方の手でホッペをつつく

嫌なら腕を放せばいいのだが、一度掴んでしまった手前放すのもなんか惜しい…

と、またチニシヤ猫に笑われる…

そんなことをへつらひながら、ひふたりは中庭に向かひました

「あれ？他のみんなは？」

着くと丸テーブルの机には四つのイスが置いてあるが一人分のセットしか用意されていない

「ああ、あの三人（一人+一人）は図書館行ったよ～」

イスを引いて座るよう促されるとアリスは座つてチェシャ猫を見上げる

「やうなの？」

「うん。アリス勉強してて邪魔しちゃ悪いからって言伝頼まれました」

チェシャ猫がカップに紅茶を注ぐ

「気にしなくていいのに…」

「みんな気を使つてくれたんだからそんなこと言わないの」

帽子屋は気なんて使つてなかつたけど…

「けど行きたかったなあ…」

やつぱりショーグルアーリス

「俺と二人じゃ不満?」

自分の分も注ぎ終えたチエシャ猫はアリスの横のイスに座りくつろいでいる

「そんなことないけど……やつぱりみんなでワイワイやりたいかなあつて……」

「俺はこんな風に一人でまつたりしててもいいと想つけどねえ」

それに……とチエシャ猫が続ける

「ほとんど毎日……と夜は必ずワイワイやるんだから……特に帽子屋の相手なんですか~」

疲れるだけじゃん?と話すチエシャ猫

確かに……と思いアリスが「ふつ」と吹き出せば「でしょ?」つとチエシャ猫もケラケラ笑いだした

あー……腹筋痛い

+

「これもチエシャ猫がおもしろおかしく三人の話するからだよ…

そのチエシャ猫は「うと冷やして置いたとゆうトザートを取りに行っている

帽子屋が実はリアリストだとか…

三月ちゃんが怪力だとか…

今も思い出すと……ふつ

中でも一番面白かったのは白ウサギくんの実は大人なんです疑惑かなあ……だってあのドジでまぬけな可愛い白ウサギくんがだよ？！

思わずありえないって爆笑しちゃったもん

「…まーだ笑つてんの？」

「ぎやあ！！」

…ガターン！！！

クスクス笑つていると声をかけられ、アリスはビックリしてイスごと倒れた

「いついいいいいつ戻つて来たの？！」

「たつた今だよ」

丁度いいやとゆう感じでアリスには見向きもせぬ鼻歌を歌いながら  
チヨシヤ猫は持ってきた「デザート」を置く

「…せめて心配くらいこしてよね…」

「ん？ 心配して欲しかったの？」

「…む…」

そういえば心の中読めるんでしたね

由々しへチヨシヤ猫が言つ

「わかつてゐくせに…」

ふくつとアリスが頬を膨らますと  
チヨシヤ猫がニッコリ笑つて

「デザート温くなつちやつかから早く食べよつ」

暗に、そんなのどうでもここからと聞こえてきたらうだ

「うん…」

確かに美味しそうなゼリー…

手が差し伸ばされないのはわかっているので、自分で立ち上がりイスを直す。そしてアリスが座ろうとする

「ちよつと待つて」

え？

「せめて汚れは払つてよね～」

手で軽くパンパンとスカートについた汚れを払うチエシャ猫

「あ……ありがとう……」

「いーえ。」

終えたのかチエシャ猫はイスを引いてどうぞ？とアリスを待つている

むー……、こうしてみるとちゃんと執事っぽいんだけどなあ……

まじまじとチエシャ猫を見る

「…………そんなに見ないでよ。ほら、早く座なこと食べちうよ～。」

……え？ゼリーを？

そこで少し考えた私の頬にチエシャ猫の手が触れた

……ん？食べるつて……わた……

「んなわけないでしょ」

最後までいくまえにチエシャ猫が不快と顔に貼り付けてむぎゅっと  
思いつきりつねつた

「痛い！いたつイタタタタタタア～～！」

「おつ柔らかいねえ」

痛いとゆう叫びが耳に届いていないのか私をスルーし奴は感動した  
ようにほっぺを伸ばす

「（なりなこすんのよおせへー。）（なりなこすんのよおせへー。）

涙を浮かべながら抗議すると、「つねつてんの。見て分からぬ？」と返された。

見なくて もやられて んだからわかるつづーの！ー

「座つておやつ食べる?」

「早くねばヤー・（食べるわヤー・）」

なによつ私がまだおやつにありつけてないのはチエシャ猫のせいじ  
やない!!

ピクッとチエシャ猫の耳が動いた

「…」めん。何言つてゐのかわからぬいや〜

そんなはずない！！

むうつとチエシャ猫を涙ぐんだまま睨むと

ムツツツギュ——ツ

「"「」%&」=」

!-----「

十卫

++

!!!

両方のほっぺを引っ張られた。力一杯。

「俺ねえ、俺のせいじゃないのに俺のせいにされるの大つ嫌いなの」

「

「口二口笑いながらほっぺをまわしたり、たてよこにしたり遊んで  
いる

アリスはもうやられたくないで瞳に涙を浮かべ、ヒロヒロする  
ほっぺを我慢しながら大人しく聞いている

「それにさ、アリスがおやつにありつけないのもさつと座らなか  
つたアリスのせいなんだよ?」

なるほど、チエシャ猫的、原因が私なのにチエシャ猫のせいと言つ  
たのが悪かったのか…

……どうしても待たせたのはほんのちょっとじゃない…

「ん?なんか言つた?」

チエシャ猫の指先に力が入る

「こついいえ……ひょんでも「じゅいましまん……（とんでも）」

「いません……」

「ふむ、謝罪に免じて今のは聞き逃してあげるよ」

とつあえず、ヒュン・シャ猫が続ける

「まあ、身を犠牲にして学んだだらうから……次からは気をつけてね？」

「クリアリスが頷く

「……返事は？」

「……はい」

無言の頷きはダメですか……

やつとあつつけたゼリーは温くなつてはいたがとても美味しかった

「マンゴー味のゼリーにマンゴーソースう　上に乗つた生クリームとマンゴーの果実がまた……」

よつまマンゴーゼリーだったわけ

「そんなんに美味しい？」

私が味わつて食べている間にヒュン・シャ猫は食べ終わったのだらう  
一ブルに肘をつき、頭を支えた状態でこっちを見ている

「うふーーめっちゃ美味しいーー幸せーー」

「さつ? よかつた」

さつきの機嫌とは打って変わつて、口と口と上機嫌っぽい

アリスも痛みなど忘れたかのようにハシハシしている

……それから少し経つて私が名残惜しそうに最後の一 口を食べ終えた

……食べ終わつてしまつた…

「じゅあ行こつか」

チョシヤ猫が立ち上がる

氣付くと涼しい風が吹いている

まだ明るいが時間的には夕方の4時くらいだろつ

「もうこんな時間なの?」

「うふ。すんごい味わつて食べてたね」

「うつ…

「だつて美味しかつたんだもん…」

「さつきも聞いた」

スッと手がのびてくる

……つねられる……

え？ なに？ 時間かけて食べたのが悪かったのかな？ ！

身構えたアリスだが一向に痛みは感じない

感じたのは頭を撫でられる感触だった

ん？

キヨトンとした顔で見ている

「……つねられたいの？ もしかしてアリスってM？」

ブンブンと横に顔を振る

「答えになつてない気がするけど……まあいつか

チエシャ猫が頭に乗せていた手をはなす

「俺、片付けてくるけど、どうする？ 」

「ん~……もうひとつとこる~」

「そつ？ じゃあまた後でね

去つて行くチエシャ猫を見送ったアリスは木の下の木陰に移動する

ちょっと暑いけど…お風呂じゃないし…

風も涼しいし気持ちいいな

「ふわわ」

…眠くなってきたなあ

ちょっとだけ…

欠伸をした後、木に寄り掛かつて目を閉じた

チエシャ猫 side

夕飯を作り終えた

時間は6時くらい。あれから2時間は経つていて外も夕闇が濃くなつてきた

そういうえば静かだな…

ああ、アリスが戻つて来てないのか

仕方ない…と外へと向かつた

庭へに着き辺りを見渡すと、木の下で寝ているアリスを見つけた

近付くとアリスは

「寝てるし…」

春でもないし暑いから寝にいいださう…

「アリスー」

声をかけてみるが熟睡しているらしく起きない

ふう…

なんか俺も眠くなつてきたな…

ストンとアリスの横に腰掛ける

その時フツと視界に一本の薔薇が目に入った

…赤薔薇と白薔薇

まるで…ひらを覗き込むかのよつこ

「…不快だな」

…グシャツ…

一色の花びらがチエシャ猫の手のひらからハラツと散つていった

+

「ん…」

「あ、起きましたか？」

皿を開けるとそこには田中サギくんの顔があった

え？白ウサギくん？

つーか真つ暗…

「やつと起きたの？」

横を見るとチエシャ猫が座つている

やつと解放された

とばかりに伸びをしてスタスターと歩いてしまつ

ビーナスら彼に寄つかかっていたら

「やつと起きたのがこ…！やつわと起してしまえばこ…ものを…！おが、ア、腹ペ…じやないか…！」

イスに座って紅茶を飲んでいる帽子屋  
足を組んでいるのは言つまでもな

寝起きたて帽子屋な…

「帰つてきたらふたりして寝て…いるから驚いたぞ。」

しかし、夕飯は作つてあつたから問題はなかつたがな

と二度ひきさん

「起きるの待つていたんですねーだからみんなお腹ペ…ペ…なんです…！」

白ウサギくんが手を引っ張る

「先に食べててくれても良かつたの…」

「…か、それが普通だと思つてたし…」

セツニツヒトロウサギくんがキヨトンとした

「なにを言つんだい！？」

返事をしたのは帽子屋だ

「独りで食べる食事ほど不味いものはないね！――！」

「ですか～」

「ああ」

「…たまにはいいこと言ひじゃん」

三人が同時に頷く

帽子屋のことだ、自分が楽しければいいとかいいそつだもんな…

さあ――ご飯にしましょう！――

と今度こそ席に連れて行かれ座られる

「たまには外での夕飯もいいね」

「だらう――それに気付けたんだ！僕に感謝したまえ――！」

「いいから落ち着いて食べんか」

三人のやつとりを見て白ウサギくんと私は一緒に笑う

ヤマネくんはテーブルの上で寝そべりながらもモグモグしている

彼らが来てからの中…

ボタツ

「…アリ…ス?」

「…お姉さん?」

「なにを泣いてるんだ?」

「…え?」

ポロッと温かいものが頬を伝つていくのに気が付いた

「あれ?」

なんで涙なんか…

「や…やだなあ…楽しいのに…なんで…?」

「…ん」とチエシャ猫にタオルを渡される

「……今までこんな楽しいのなかつたか?」

渡されたタオルで涙を拭う

「ふむ、ディナーの楽しさを知らなかつたのかい?ならば涙の理由も頷けるね!これからはそんな愚かな(バカな)人達の事は放つておいてパートといこうではないか!!--」

「…そういうえば花火とゆうのがあったので買ってきましたよね…」  
「…うん! やろう! --」

白ウサギくんがビールを持ち上げる

アリスに笑顔が戻る  
もう涙は浮かべていない

そんな楽しい一夜

この時間がずっと續けばいいのに…と

誰かが呟いた

23日 三 チェシャ猫とアリス（後書き）

ラブ×2が書けません。rz

期待していたかたごめんなさいm(ーー;)

あつといつの日か( ^ー^ ;)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4144d/>

---

お家の国のアリス

2010年10月15日10時03分発行